Liarsoftの嘘つきエンターティメントマガジン

月刊うそ。

USO

TOPIX

- ギリシャ破綻危機でニコル相場大変動！
- メアリ娘に熱愛疑惑!?お相手の黒ずくめの男性の正体とは!
- ライアー女子の間で山ガールファッションが大流行!!
- 宗右衛門VSリーピチープのデスマッチ開催！
- オリジナルTV「侵略カ二娘」が配信予定
- ドイツの世界樹、世界遺産に認定か！？
- 信天翁号深い霧の先で豪華学園船と遭遇！
- ライアーセンター試験、嘘の開催日で会場混乱！？

TOPIXネタ投稿募集中〜 ポイントもつくよ!!



ライアーソフト30弾！ オンナノコの恋、応援します!!

Volume. 40

屋上の百合霊さん

総力特集 百合

☆ シャーリー嬢、意中の彼女は碩学院の同級生!?
☆ 園美「女の子って砂糖菓子で出来ているって本当?」
☆ 因幡うさぎ〜ズにも百合カップル疑惑が！「ないない」×2
☆ 「ゆるゆり」人気に乗じて女雪相撲第2弾「おにゆり」計画中？

Quarterly
400ニコル（税込）

cover model=因幡うさぎ〜ズ&いち、山人、伊波 photo=忌野Lem

INDEX

SEASONLY LIARMARU

今号の「ANGELBULLET」「絶対地球防衛機メガラフター」「信天翁航海録」はお休みいたします。

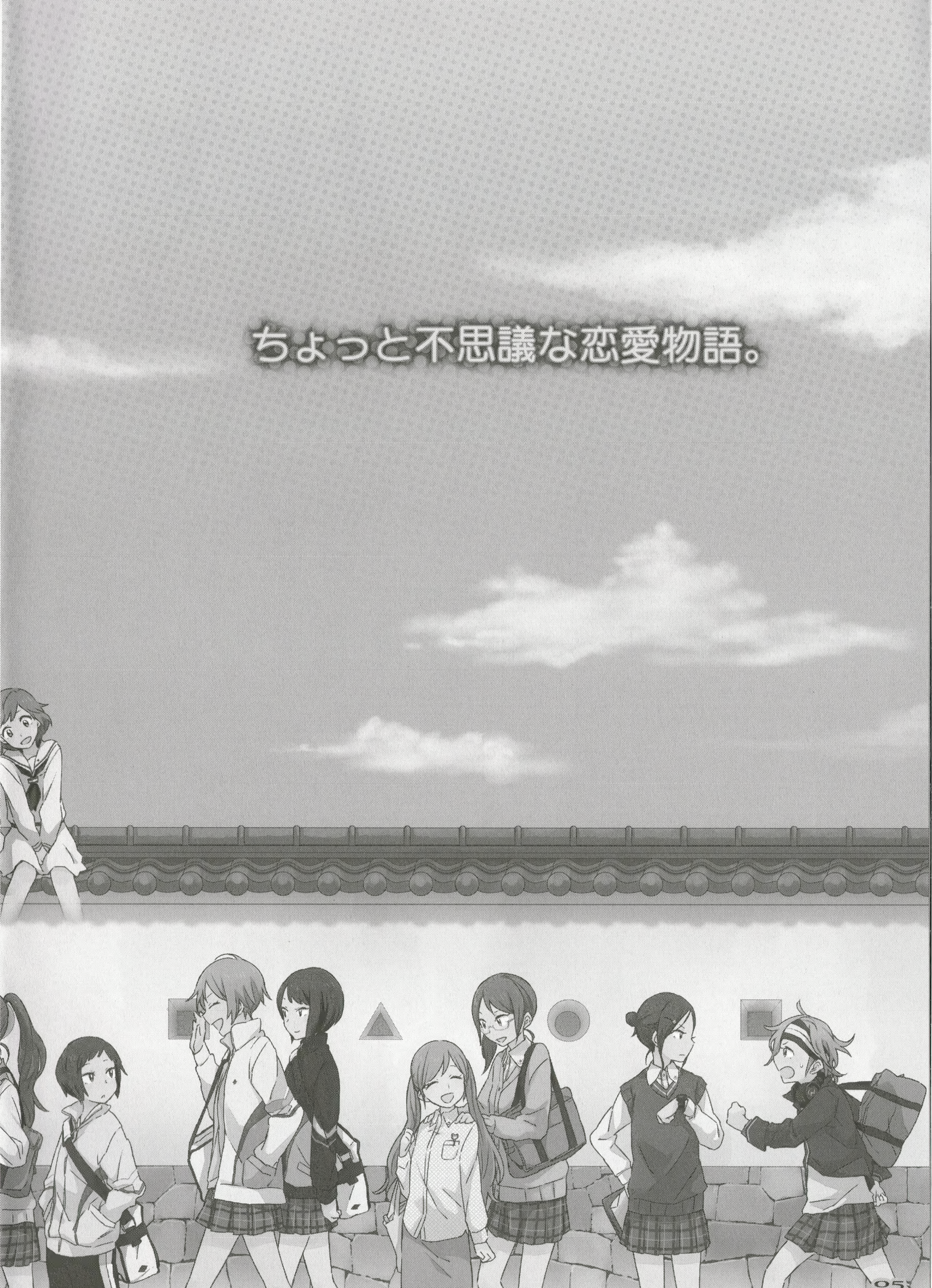
COVERGIRL

因幡(いなば)うさぎーず



もむもむもむもむ…（恵方なう）／もごもごもごもご…（恵方なう）／もむもむも…も！？（コーナー始まってることに気付いた）／もごもごもご（気付いてない）／ももももも！（教えた）／もご！？（気付いた）／もっぎゅもっぎゅ！（ペースアップ！）／もっぎゅも……もっ！（詰まった）／（…ごくん）／（…ごくん）／明けま…（終了）


オンナノコ×オンナノコ＋百合霊の


ちょっと不思議な恋愛物語。

私立『商科九ツ星女子学園』、城跡を敷地に持つ、通称『城女』。

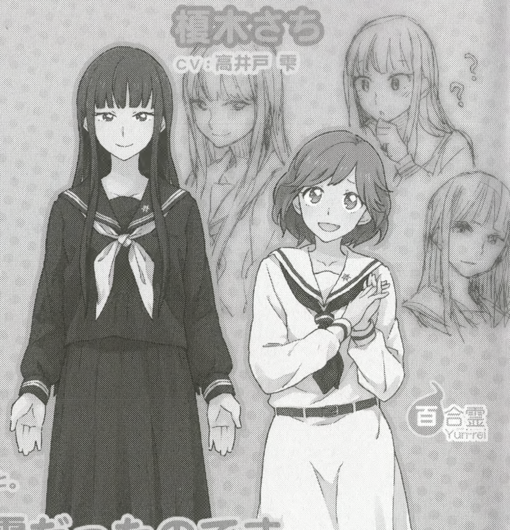
今日も、『遠見結奈』は一人で屋上で、お弁当を食べる毎日。
人付き合いを嫌って、こうして昼休みを過ごしてもう一年。

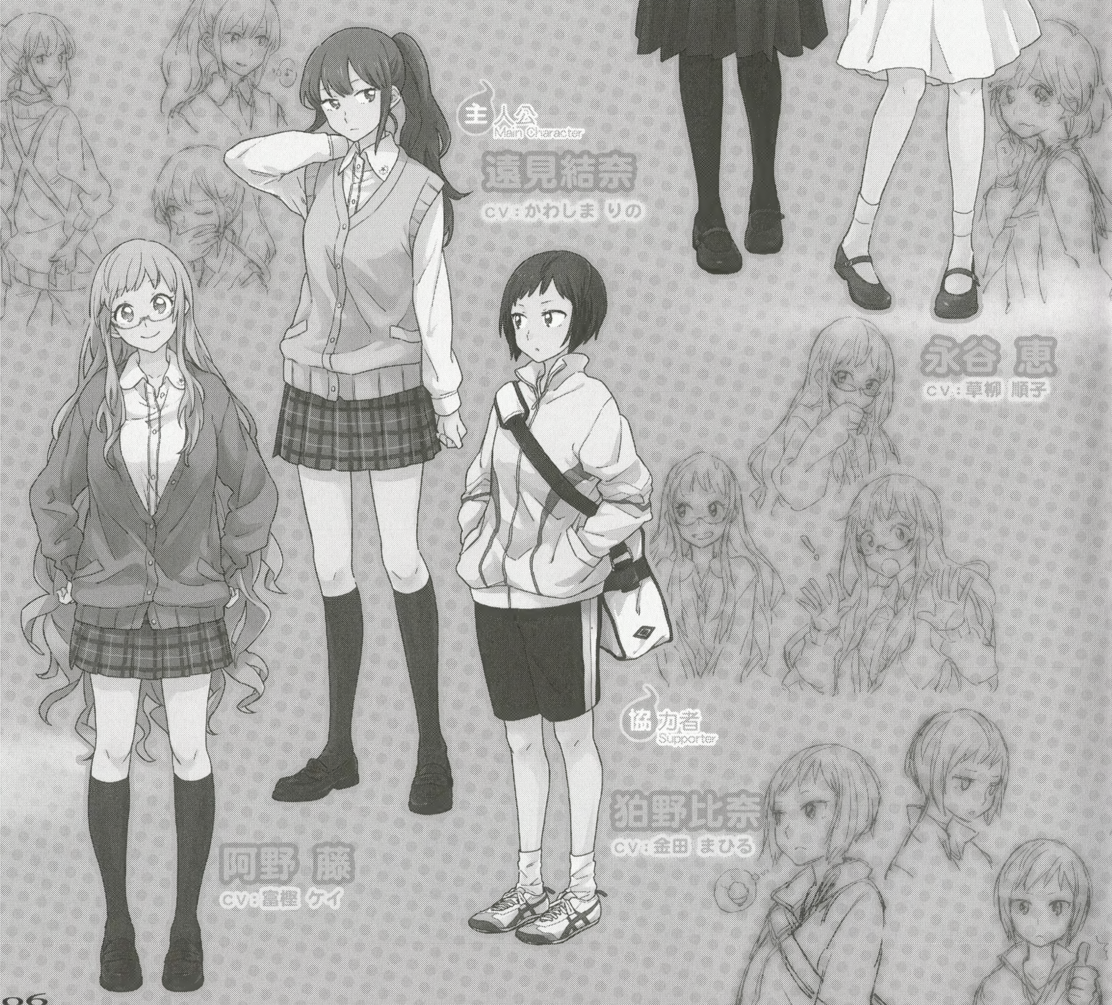
しかし、その日。

結奈はこの学園の屋上にいる二人の幽霊に出会う。
戦前に事故死した『榎木サチ』と、３０年前に病死した『永谷恵』。
二人は屋上で幽霊をしながら、日々、学園の様子を見つめていた。

自分たちの姿が見え、話すことができた結奈に、二人の幽霊は、
ある提案を持ちかける。それは、学園内にいる女の子への恋心を
秘めたまま思い悩む女の子への『恋のお手伝い』だった。
同じように恋心を秘めたまま亡くなって幽霊となった二人にとって、
同じような悩みを抱える女の子たちを放っておくことはできない、と。

そう、二人は恋人同士、百合霊だったのです。

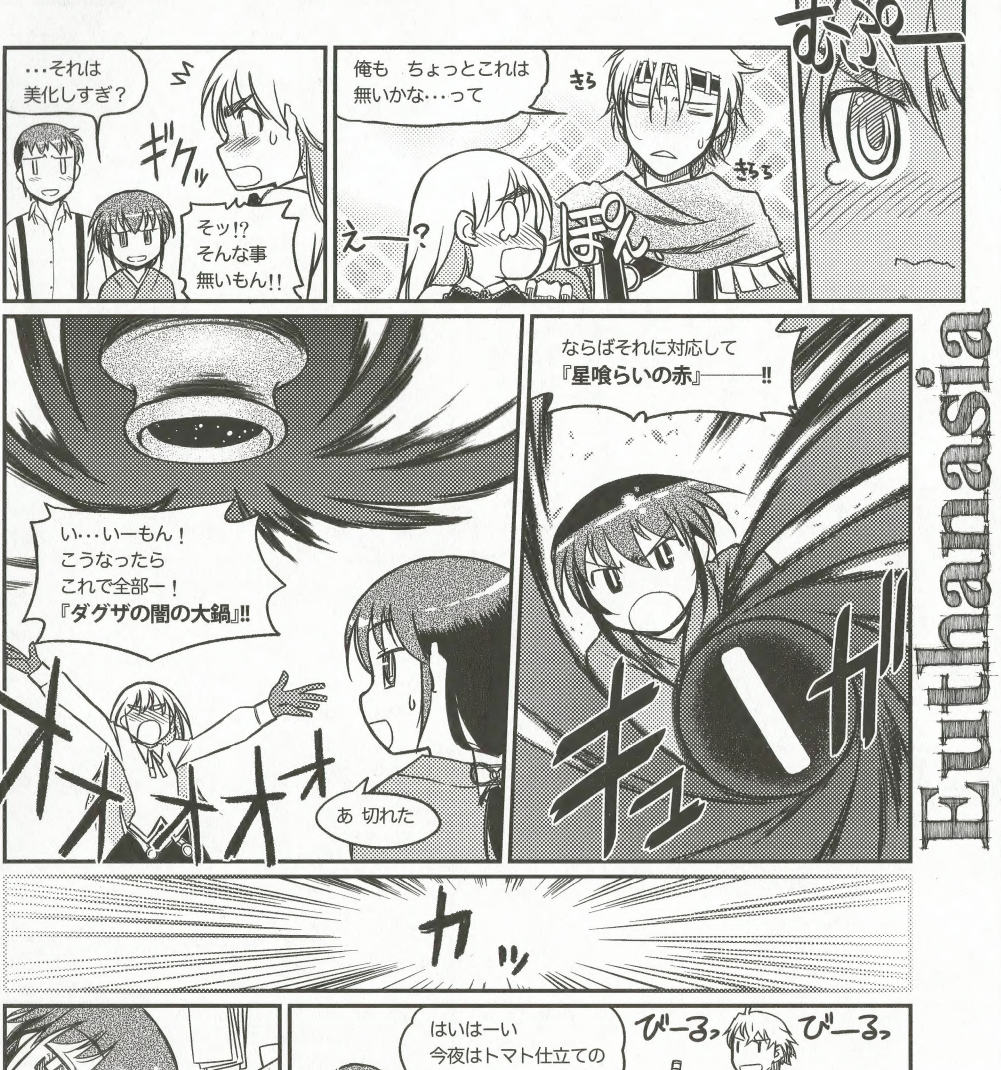





牧 聖笛
cv：桜川 未央
先輩と後輩
Couple-A
相原美紀
cv：水純 なな歩
友情？愛情？
Couple-B
双野沙紗
cv：榛名 れん
一木羽美
cv：金田 まひる
教師と教え子
Couple-C
三山音七
cv：野月 まひる
剣峰 桐
cv：榛名 れん
園生月代
cv：草柳 順子
生涯一緒に
Couple-E
身分違いの恋
Couple-D
古場陽香
cv：理多
稲本美夕
cv：野月 まひる
網島茉莉
cv：桜川 未央
有遊愛来
cv：富樫 ケイ
屋上の百合霊さん
Liar soft 30th
CHECK IT OUT!
2012.03.30 IN STORE
ファンクラブ通販でお求めいただきますと、共通特典「挿入歌マキシCD」とFC専用スペシャルドラマCDをお付けいたします！

■三題噺■　会員の皆さんに一個ずつお題を頂いて、割合と頭のよろしくないお話をでっち上げようと言う試みです。





正月っぽさから外そうと思ったら妙な事に・・・あ、いつもの事ですかそうですね。
今回使わせて頂いたお題は「雪合戦」=天井下さん、「お尻」=かいむなつきさん、
「鍋」=アンドリューさんでした。他の皆様にも感謝。です。

vsスレンダー

千年戦争

■スレンダー陣営お便り紹介

ノブ「はいはい、じゃあ次はスレンダー陣営のお便りを紹介していくよー」
ヒロ「今回のテーマは宇宙人だってさ。宇宙人と言えば一番はじめに思いつくのは――」
ノブ「当然、異星人解剖フィルムでしょ！！」
ヒロ「え、えー」
ノブ「1995年にイギリスのなんとかってんが公開した、通称サンティリフィルム！ てことで、今回はスレンダーな宇宙人の解剖シーンを大公開！」
ヒロ「それじゃスレンダー陣営じゃなくって、Y太陣営になっちゃうからダメ！」
ノブ「えー、解剖フィルム格好いいのに……」
ヒロ「はいはい。時間もないから、とっととお便りを紹介してくよ」

『スレンダー星のスレンダー星人は皆スレンダー。スレンダーが正義。地球人にスレンダー体型の素晴らしさを広めるべく、とある季節になるとその肉体を見せつけるように街中を飛び回ります。チャームポイントはおへそ』
（PN：カナエー号さん）

ノブ「見せつけるだけじゃなくて、同じ体型になるよう改造手術してくれたほうがうれしいんだけどなぁ」
ヒロ「いや別に必要ないんじゃ？」
ノブ「ふっ……、正月は油断すると大変なことになるのよ……。あー、どっかの宇宙人がキャトルミューティレーションっぽく脂肪抜いてくれないかなぁ」

『ニャントロ星人さんに紙を食べさせて、ナデナデしてあげたいです。かわいいですよね！語尾に「ニャン♪」が付くからと言ってニャンニャンしないようにご注意を』 **（PN：ふ～ちゃんさん）**

ノブ「ダメだよ！ 紙ばっかり食べさせると倒れちゃうから！」
ヒロ「それで幼稚園で飼ってたヤギを病院送りにしたもんね」
ノブ「だって秘宝の地図を処分するのに、あのヤギぴったりだったんだもん」
ヒロ「それ全部自分で書いてたじゃん……」
ノブ「とにかく紙のあげすぎには気をつけて！」

『宇宙人、それは人にとって未知なる生物。様々な想像が湧き上がるテーマですが、自分が思い浮かぶのは首元から足首までピッタリとしたスーツに身を包んだスレンダーな美人さん。振動するものが微小にしか存在しない宇宙でもその僅かな音を受け取れる様に発達した長い耳。無重力下において周囲の情報を受取る触角。冷たい目で地球人を観察する視線。想像するとたまりません』
（PN：トリスメギストリスさん）

ノブ「おお、SFだ！」
ヒロ「宇宙っぽいぴったりスーツっていいよね」
ノブ「え、それって要するにラバーフェチってこと？ 好き好き大好き？」
ヒロ「それのどこがSFなんだよ！ 宇宙っぽいっていってるじゃん！」

スレンダー陣営公認絵師の東麻姫先生に、イラストを描いていただきましたー。
東麻姫先生のコメントです。

『宇宙人というと自分の中で大きいのはコ○モ星丸とウ○トラマンなんですが 特に前者は若い子には通じにくいぞっ☆ （宇宙っぽい語尾）
某しティキュリアンさんが見切れてるように見えるのはきっと気のせいです。
チャンスがあればいろんな作品のキャラをねじ込んでいきたい！』

ノブ「星丸？ なにそれ」
ヒロ「筑波博のマスコットだねー。ぼくらが生まれる前の万博だよ」
ノブ「あー、そっか。万博って花博くらいしか知らないから……」

（チッ、このゆとりどもめ……）

ノブ「な、なんか禍々しい声が聞こえたような？」





■きょにう陣営お便り紹介

モコ「ではトリはきょにう陣営です。おっきいことは良いことだ！
　ということで今回のきょにう解説者は――」

皇光刀「私だ！　より詳細に言えばピンクパンツァーで、いやこの地球でもっとも高貴な血がどっくどく流れているノーブルマン、すなわち"すめらぎのみつぐかたな"だが、高名すぎる故に名乗る必要もないだろう。今回テーマが宇宙人と言うことで、地球代表にもっともふさわしいこの私が出てきてやったのだ、さあ、さっさとお便りを紹介するがいい！」

『宇宙船に乗ってやってきた巨乳海賊のお頭姿にときめきます！
　露出高めの衣装で、戦闘ではぶるんぶるんしながら戦って敵を誘惑して負け無し。気に入った地球人はもれなく彼女の船にお持ち帰りな展開に巻き込まれたいです』
（PN：カナエー号さん）

皇「宇宙海賊！　心震える響きだな。私の高貴な魂は、海賊帽にマント、でも下にはなにもつけていないってのを求めているのだが、どうかね！」

モコ「どうかねって、単純に性癖だだ漏れなだけじゃないですか！　巨乳関係ないし！」

皇「馬鹿者、巨乳は最低条件だろうが、マントの下でぶるんぶるんしいよるのがタマランのだよ。まぁ下賤なものにはわからんだろうがな」

モコ「はぁ」

『巨乳はその胸の大きさがすでに宇宙人レベルだと思います！』
（PN：みぐらさん）

皇「うむ。良いことを言うな。さらに地球人も視点を変えれば宇宙人であることを考えると、宇宙は巨乳に満ちているといえよう。巨乳バンザイ！」

モコ「いやあの、巨乳じゃない人もいますけど？」

皇「そういうのは人外ってことで、キリヤマ隊長あたりに任せたまえ」

モコ「ジェノサイドじゃないですか！？」

『皆様は宇宙人と呼ばれる者たちの格好が主に２系統にわかれているのにお気づきでしょうか？　すなわち、怪獣型と怪人型です。これらの姿を人間に置き換えてみると……
　なんと全裸と全身タイツ！
　もうお分かりですね。
　宇宙人は基本的に痴女なんですよ、痴女！
　信じられないかも知れませんがコレが宇宙の大いなる真理なのです。
　それでは、本日の皆様のご希望は、ワイルド系全裸巨乳痴女と、クール系ピチピチ全身タイツ巨乳痴女の、どっち！
　あ、ちなみに私は両方でお願いします』
（PN：アンドリュー）

皇「残念だが両方選べるのは、名字と名前の間に『の』が入る、私のような高貴な人間だけなのだ。そして君の名前に『の』はないようだな。ではせいぜいツルペタのグレイとでも戯れていたまえ」

モコ「す、すみません、アンドリューさん！　あとで言って聞かせますからっ！」

きょにう陣営公認絵師のせんばた楼先生に、イラストを描いていただきましたー。
せんばた楼先生のコメントです。

『高度な文明を持ちながら種として滅びつつあるキョニウ星の宇宙人が攻めて来た。
　彼らは殆どが雌で、いまだ活力旺盛な地球人男子の健康な肉体とその種子を求めているのだ。
　逃げろ！　捕まると彼らの星まで連れ去られ、若い女宇宙人たち（大勢）と死ぬまで○○○三昧であとは食っちゃ寝でネトゲでもするしかない地獄の様な監禁生活が待ってるぞ。
　……という夢を見ました。怖ぇ。
(・∀・)』

皇「なんという高貴な夢。くぅう、負けられんっ！　私も寝るぞ、布団をしけい！」

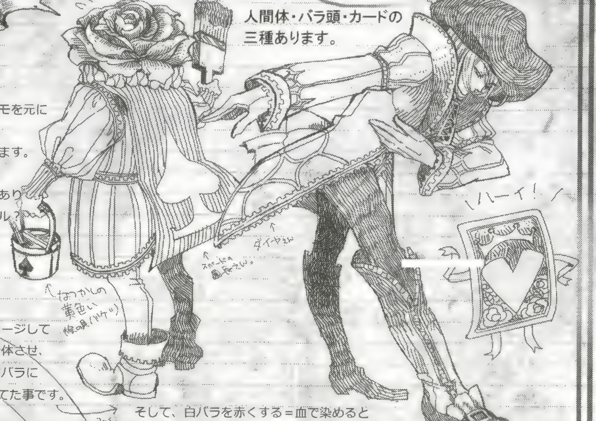
モコ「こ、高貴、かなぁ……」

■お便り募集！

早苗「どもっＬＬＥの」弥生「時間がないからさっさといくわよ」早苗「ちょっ、自己紹介くらいさせて」若葉「じゃ次のお題ですね。今回は結構投稿が多かったんですよ」弥生「前の５倍はきたものね」早苗「ひょっとして、いままでこの場所が気がつかれてなかったとか……？」弥生「黙ってて」若葉「で、厳正な審査の結果、次回のテーマは『入浴』に決まりましたー。あかべこさんには、５ｐ差し上げます！」弥生「良いんじゃない？　もしかしたら昔似たテーマを扱ったかもしれないけど、その時はスレンダーがなかったし」若葉「というわけですんで『入浴』をテーマに、ろりっこ、きょにうさん、そしてスレンダーさんならではの魅力について、熱く語ってくださいね」早苗「あ、あと、あたし連宛のお便りも募集してますよー」３人「それじゃまたねー」

Memory of ancient forest

トランプの臣下達
(不思議の国のアリス)



当時の絵の横にある自分のアイデアメモを元に
これを書いているのですが、
ロディマス並みに謎な言葉も多数あります。
この絵には「椿が落ちるちるミチル」
「うちあげられキューピー」と記してあり
なにコレシュール！自分が自分にリドル？
と、すごく時間差のあるセルフ
ツッコミをしてしまいました。

……「椿が落ちるちるミチル」は
アリスのハートのクイーンの首切りと、
椿が首から落ちる様が斬首や介錯をイメージして
武士に嫌われていたという話を合体させ、
斬首を想像させる椿をバラに
見立てた事です。

そして、白バラを赤くする＝血で染めると
解釈しました。
バラ頭はどのアリスの挿絵でも見たことがなかったので、ウフフ良いことを
思いついたと喜んでいたのですが、しばらくしてから「虚無への供物」の
表紙のバラ人間が琵琶？を弾く絵を見つけて、私がブックカバーをかける前の
絵を覚えていて影響を受けたのではないかと思ってかなりションボリしました。
（あれは主人公が男のアリスですし…）
…ちるちるミチルは語呂が良い言葉をくっつけて変な造語を作るのがクセなので、
なんかやっちゃったのでしょう。今でも同じことを書くに違いないよ。
「うちあげられたキューピー」は思わずたまやーと花火的な連想をしますが、
イナズマンのバラバンバラの回で浜辺に打ち上げられた
キューピーの図が差し挟まれるシーンが
やけに好きなのでそれだと思います。
つまりバラ人間を描いて
バラバンバラを連想したのでしょう。
ゴレンジャーのエンディングと
バラバンバラを混同していた幼き日…

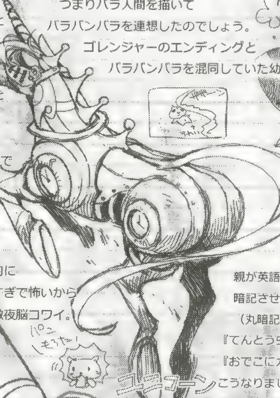


絶滅恐竜の路面電車

過去の『ロストワールド』だから、
恐竜なのねと思います。多分。
旧都電を描くべきでしたが、
私が幼いころ三軒茶屋に住んでいたので
世田谷線の緑の路面電車が
モデルです。
（路線まだあるのにスミマセン…）

ＦＯＲＥＳＴのデザインは
登場人物の為に
描いたのではなく
ひたすら主観的に内面世界と
過去の思い出を描く
描き出した感じです。

私の無知や子供っぽさ、うんと背伸びした知識を
上手くＦＯＲＥＳＴというゲームの中に
組み込んでいただけたのだと思います。
知識と経験の差はまさに生徒と先生のようで
この作り方は多構造のこの物語でしか
意味が無いと思います。今でも、
下手でもオリジナリティのあるものが
描けて幸せだったと思っています。
サテ、逆に主観から離れて客観的に
当時の私に言えることは、考えすぎで怖いから
ちょっと寝ろ休めです。　徹夜脳コワイ。



ユニコーン

マザーグースのライオン＆ユニコーンは
パンを貰って町から追い出されたので
トースターと合成しました。



てんとう虫妖精さん

画面が地味かと思いまして、
チョイ役を引っ張ってきました。
親が英語を教える仕事で英語の詩や童話を
暗記させられたのですが
（丸暗記過ぎて実践で役に立たぬ）
『てんとう虫』の詩の次が
『おでこにカールの女の子』だったので
こうなりました。



借りぐらし
(床下の小人たち)



■結婚式の日！／シェラの日記より

（口述筆記。記述はレヴィの手による）

西享歴は、えっと、１９０８年でいいの？

帝国歴だと何年なんだっけ？（レヴィ注：２２１１年）

うん。とうとうこの日がやってきた。そうなるかもしれない予感は何度かあって、でも、そういう訳にもいかないっていう事情も幾つかあったから、結ばれてから数年たって、もしかしたら気持ちが変わることもあるんじゃないかな。そう思ってたんだよ。

でも。でもね。

そうなったらいいなって思うようにもなってた。

いつの間にかね。

いつからだったんだろ？

わかんない。気付いたらいつの間にかだよ。

もう、レヴィ、なんでさっきから黙ってるの！（レヴィ注：口述筆記をしているから。僕と受け答えしてたら変な感じになっちゃう）

ともかくね。

嫌だなって思うことも、あったよ。だってコニーは……。

シェラのコニーお姉ちゃんなんだもん。カル君とそういう風になっちゃったら、そうじゃなくなっちゃうような気がして、だから、ずっともやもやしてたんだ。

でもね、ニェルレイとソム＝メソムの結婚式の時にね。

コニーってば、いい顔してたんだ。

嬉しそうっていうのはもちろんそう。ふたり、くっついたのかなって思ってたけどまさか結婚しちゃうなんてびっくりしたけど、でも、やっぱりシェラもコニーも嬉しかった。レヴィもそうだね。カル君もきっとそう。

でね。あの時のコニーね。

羨ましそうでね。

眩しそうだったんだ。

でね、子供は最低でも１０人ほしいンだゾって（レヴィ注：この口調の真似方はすごく似ていた）ニェルレイが言った時、コニー、すっごくすっごくいい顔したの。びっくりしちゃった。なんかね、ぱあっと、眩しくて眩しくて、シェラ何度もまばたきしたよ。

それでね、思ったの。

ああ、コニーもそうなのかなって。

ママになりたいのかな。

家族、もっともっとたくさんほしいのかなって。

そしたら、シェラも、ちょっといい気分になってた。だって考えて、コニーとカル君の子供！　シェラはおねーさんで、女の子だったらご本読んであげて、男の子だったらお魚とったり虫とりにいったり！　それってすごくすてきだよ。楽しい。考えるだけでワクワクして止まらないの！

だから、ね。

シェラはいいんだ。いいんだよ。

コニーはもしかしたらコニーお姉ちゃんじゃなくなっちゃうかもしれないけど、コニーママになったら、シェラは子供たちのおねーさんになれるんだよ。

それってさ。

すてきなことなんだよ、すごく！

◆　◆　◆

「あ。出てきたよ」

「うん！」

暗い顔になんかならないもんね。だって、今日は、とっても素敵な日。嫌だなんてもう思ったりしない。あんなに幸せそうな顔を見たら、うん、そう思う。

それに、素敵なことだってこれから沢山あるもんね。

えへへ。女の子かな。男の子かな。レヴィは気が早いって言うけどそんなことないんだよ。ニェルレイ、もう、子供ふたりもいるんだもん！　かわいいかわいい男の子と女の子。

今日もきょーかいに来てくれてるんだよ！

レヴィの声に頷いて、シェラも教会の入口を見る。

出てきた！　花嫁さん！

真っ白い綺麗なドレスに身を包んだ、花嫁さん。

あたしの、シェラの、お姉ちゃん。

コニーお姉ちゃん。

これからはきっとママになったりするんだよ。

誰より素敵な、きれいな花嫁さん──

「おめでとう」「おめでとうございます！」

マタイオスとネーエルが拍手してる。

ネーエル、嬉しそう。マタイオスさんってあんな風に優しそうな顔もできたんだね。なんだか変。

「やれやれ」「いやあ寂しくなるなあ」「まさかあのコニー坊やがこんな別嬪な花嫁さんとは」「年取る訳だよなあ」「お前んとこのガキももうでかいしなー」「やめろって！」

ギルドのおじちゃまたちも嬉しそう。

む。ラス・カサスのじいちゃま、ちょっと泣いてる？

「ああーっブーケ！　ブーケとられるー！」

「おっ。おっ、取るのか取っちゃうのか、ジェライラ！」

「あっ、あっ……」

「ジェライラ動かないの！　ブーケキャッチはレディのたしなみ！」

パルポがすんごい残念そうな顔してる！

ニェルレイは流石のよゆーだよね。さすが若奥さんっ。

ゼーズロム、じゃなくて、ジェライラちゃんがブーケ取る、取る、ほら取った！　ナイスキャッチ！　じゃあ、次の花嫁さんはジェライラちゃんなのかな。誰と結婚するんだろ？　まさかラスじいじゃないよね。

ちっちゃいメアリはやっぱりお姉さんっぽいね。ジェライラになついてるっていうか、ジェライラがなついてるのかな。

みんながここに来てくれたんだよ。

帝国にいるひとも、未知世界のみんなも。

アスルとクセルもいればよかったのにな。

きっと喜んだと思う。

だって、ほら。見て！

コニー、あんなにいい顔してる。

真っ白な花嫁さんのドレスがすごく、すっっごく素敵！

眩しくて、眩しくて、未知世界の太陽みたい。

きらきらしてる。

おひさまはきらきらしてないと、ね！

だから、シェラは花びらをたくさん、たっくさん撒くの。レヴィと一緒に、ほら、コニーのきらきらをもっともっと飾って──

（了）

●本コーナーは今回で最終回となります。ご愛顧ありがとうございました！





■マスクドシャンハイ未公開ファイル

このマスクドシャンハイ未公開ファイルは、俺が魔都上海で遭遇した事件の中で、本編では様々な事情で取り上げられなかったものについて、詳しく紹介していこうというコーナーだ。
今回取り上げるのは、こんなこと真顔で話したら癲狂院に放り込まれかねないってことで、関係者全員が口をつぐんでしまったため、全く記録に残っていない忌まわしい事件。ファイル名「チチカエル」だ。もちろん、あの菊池寛の戯曲とは一切関係ない。まぁこのコーナーで紹介する事件はたいてい常軌を逸しているんだが、こいつはちょっとずば抜けてどうかしてる。っていうか、あんまり紹介したくないんだよな……、正気疑われそうだし……。まぁとりあえず紹介するんで、時間のあるヤツだけ読んでくれ。後で文句とか言わないように。

○巨乳戦記

帝国陸軍が誇る美しき天才参謀、辻政信。
上海の闇で蠢く悪仙人たちを追っていた彼は、突如謎の失踪を遂げる。
だが、一週間後。
彼は巨乳になって帰ってきた。

巨乳になった辻政信は、さっそく左文字俊作、つまり俺の探偵事務所にやってきた。こういう超常的なやっかいごとは、全部俺に押しつけようという魂胆なのはわかっている。だが警戒する俺の前でヤツはおもむろに軍服を脱ぎ出すと、ゆさゆさと巨大な乳房を上下に揺すりはじめたではないか。

辻「さあどうだ見たまえ、小官の乳房を。そしてその頂で静かに息づいている薔薇色の乳首を。ほぉら美しいだろぅ、美しいだろぅ」
左文字「無駄に軍服をはだけるんじゃない！　しまえしまえ！」
辻「ふっ。そうは言うがな。君の視線はさっきから小官の乳房に釘付けではないか」
左文字「た、確かにっ！　そして今この俺の下腹部から、ものすごい勢いでパトス的なものがこみ上げてくるっ。まさか俺は男の裸を見て興奮しているのか……。く、くやしい、だが美しい……」
タマ「な、なんなのよ、この会話！　聞いてるこっちが頭痛くなってくる！」

前屈みになった俺に、辻は外の様子を見るように告げる。
このままここにいたら俺はダメになってしまう。
そう判断した俺は、即座に事務所を出たのだが――

○あっ！　キリンも象も巨乳になった！

外に出た俺は愕然とした。
ドアの向こう側にあったのは、見慣れた日本租界の風景ではなかったのだ。
本来あるべき建物は影も形もなく、その代わりにただ大きな乳房が地面からいくつもいくつも生えているという、なんだか精神を病んだ人間が描いた絵画のような光景が広がっていたのである。
建物だけではない。路面電車も自動車も馬車も洋車もチハ車もすべて巨乳になっていた。もちろん無生物が巨乳になるわけだから、生物なんか当然巨乳である。街ゆく人々みんな巨乳！　おとなもこどももおねーさんも！　いや、もはや老若男女どころか犬猫の別なくみんな巨乳なのだ。上海に存在する森羅万象すべてが巨乳なのである！　ああ、巨乳が、窓に！　窓に！　と取り乱そうにも、その窓ですら巨乳なのだ！
もうこんなの魔都じゃない。その看板は掛け替えなくてはならないだろう。
“巨乳都市　上海”と！
いったい誰がこんなことを……。立ち尽くしたままの俺は、誰にともなく呟く。
珍妙な恰好――具体的には左側の写真を見ていただきたいのだが、とにかくそんな恰好をした少女が現れたのはその時だった。
少女はなにやら決めポーズ的なものを取ると、妙に甘ったるい声でこう言うのだ！

謎の少女「驚いたかにゅ！　これがあたしの仙人パワーなんだにゅ！」
左文字「だ、誰だ、お前は！」

乳仙人「巨乳の星からやってきた巨乳のプリンセス、乳仙人なんだんにゅ！」

乳仙人は問答無用とばかりに謎の怪光線を浴びせかける！
直撃！
全身に甘い痺れが走り、そして――
俺とタマは巨乳になっていた。

○巨乳最後の日

驚く俺。そしてタマ。
デカめの複乳は意外とグロいんだなぁ、なんてことを目の端の方で確認しながら、この後の人生のことなんかをぼんやり考えていると、ぶるんぶるん乳を揺らしながらタマが乳仙人を倒せと叫ぶ。
だが俺は、先ほどヤツが放った怪光線を、躱すどころか反応することすらできなかった。果たして勝負になるのかどうか……

タマ「大丈夫。さっきの攻撃でわかったわ。あいつの怪光線は、相手を巨乳にさせる能力しかない。つまり、攻撃力なんてないのよ！　もうこっちは巨乳になっちゃったんだから、あとはもうあの怪光線のことなんか気にせず、物理でタコ殴りにしちゃえばいいのよ！」

だがしかし、乳仙人は動じることなく「こんなこともあろうかと！」と助っ人を呼び出すのだ。
具体的には、右側のマンガのように！

そしてパーフェクトではなくなったトウコツさんは、俺のボディというか巨乳を一瞥すると「キモいヤツとは戦いたくない」と言い残して退場。
思いもかけず心に深いダメージを負った俺は、乳仙人を物理で倒し、怒りを込めて封印することで、上海を元の魔都へと戻したのだった――。

▼今回登場の仙人

○仙人名「乳仙人」／推定仙人パワー：８１万パワー／特殊能力：なんでも巨乳に出来る。（注：いただいた能力を多少改変しています）
※今回登場の仙人は、ＰＮ：猫井篤さんからいただきました。猫井篤さんには５ｐ差し上げます。また「事件の傾向」では「バカ」が一番多かったです。投稿してくださった方には３ｐ差し上げます。
ありがとうございました一。

■投稿募集

このコーナーでは皆さんから投稿をお待ちしております。

○あなたの考えた仙人を募集！

あなたの考えた仙人を募集します。葉書もしくはメールに「仙人の名前」「特殊能力」「推定仙人パワー」を、外見と一緒に書いてお送りください。ちなみに正義仙人の仙人パワーは１００万弱。マスクドシャンハイは人間から仙人に改造された戦時急造仙人なので、若干低めの８３万仙人パワーとなっています。
投稿された仙人の中から１人を選び、未公開ファイルに登場させていただきます。採用された仙人は磁油２先生にイラスト化される予定です。

【記入例】仙人名「キノコ仙人」／特殊能力：食用。極めて美味。でも食べたらマタンゴっぽくなる。ふたなり製造器／推定仙人パワー：１０６万仙人パワー。

○事件のジャンルも募集中！

同時に皆さんから事件のジャンルも募集しています。未公開ファイルのうち「燃え」「バカ」「エロ」の３ジャンルから見たいものをひとつと、もしあれば、他に出て欲しいキャラクターや見せ場などを一緒に書いてください。無い場合はジャンルだけでも構いません。投稿されたジャンルのうち、一番多かったものを反映した事件の紹介を行う予定です。

【記入例】事件の傾向：エロ／出して欲しいキャラ：黄金紳士／その他：紳士ズの勇士をもう一度みたいです！



■■紅殻町博物誌外伝
——カゲロウからの迷い人（後編）——

——恐らくは。地球上ではいかなる時代、いかなる土地にあってもかつて存在せず、これからも存在しえないだろう生き物の皮をなめして作ったと思しき、不思議に柔らかな質感の革の小袋の、中から日焼けした肌の娘の手が一つまみ、掴みだしたのは砂の粒である。目の細かな、よく乾いてさらさらとした。

「それは……？」

問い掛ける青年、宮里智久は、娘の手元を覗きこめば。月影の下でさながら、ミニチュアの月の沙漠のように、掌の上に。

「砂男（サンドマン）の砂袋。この砂はどれだけすくっても無くなることはないんだ。なんしろ砂男、七体の擬人化概念体（エンドレス）、Ｄｒｅａｍからの借りもんだからさ」

「君は時々、さも当然のように、胡散臭い事柄を語るよな……」

「でもさすがにこういう局面じゃあ冗談は言わないっつーの」

夏の夜、山形は西置賜の、紅殻町のそのまた片隅、最上の川に差し掛けられた木造の桟橋の上。集った者は宮里青年と紅殻町の女性達。そして十湖と、異郷からの迷い人なる琵琶法師の。

白子とエミリアと松実、三人の、ふと目配せしあって、法師に風呂敷包みを差し出した。

「これ……？」

「お土産です。急な話だったから、大したものは用意できなかったけれども、それでもあなたがこの町にいらした、そのご記念に、と」

「え。でも、そんな、悪いよ、今まで良くしてもらって、その上にお土産なんて」

法師の、素朴で慎ましやかな躊躇いに、松実は、「ねえ、名前も知れないあなた。法師さん。あなたがやってきたのは、偶然で迷子のようなものかも知れないけれど、それでも私達はあなたと知り合えて良かったって思っているの。だから受け取って、ね？」

そうとりなしてやって、背に負うた琵琶の包みの隣に風呂敷包み、結わえてやれば法師は、くすぐったそうな、泣きそうな顔となって、よくよくこの清貧の娘は他人からの厚意というのに慣れていない。

「……あまり、引き留めていては、お別れが辛くなるばかりだね。宮里、人見、私達はもういい。

この人のこと、よろしく送ってあげて」

「そんじゃ行こうか。智久君、用意はいい？」

「用意と言っても、君に言われた通り衣装と、旅行の支度をしただけなんだが」

「後はあたしについてくる。細かいところは道々言うから」

と十湖は、掌に乗せた砂を、さっと振り撒くが最上の川面に、すれば見よ——

砂の一粒一粒、あえかな光を帯びて、河は緩やかなれど流れたるに、撒かれたままに留まって、水面に夜空の天の川をそっくり移したが如き光帯を敷いたではないか。平面上に撒かれたにもかかわらず、奇妙な奥行きと立体感を蔵した光の帯だった。

「じゃあみんな、ちょっくら行っつくらあ」

何故か伝法な、江戸弁で言うたなり十湖は、宮里青年の手を引いて、彼が何事か言う間も与えず川面の光の帯へ、突き落とす。

「ちょっと十湖さん!?」

「心配いらないよ、なにがあって智久君は連れて帰るし、法師もきちんと送ってくる。なあに、ちょっとのお別れだ」

唐突な暴挙に愕然と目を瞠る白子へ、軽く笑んで十湖は、今度は法師の腕を掴んで、一緒に飛びこんで光の帯へ、見れば宮里も十湖も法師も、水面に落ちたはずなのに飛沫一つ水音一つ立てていないのであった。後にはただ、奇妙な光の帯がたゆたうばかり、それも見ている間に、色合いを減じさせて元の川面に戻る——

◆　◆　◆

出立前に十湖は語った。琵琶法師が彼女の言う『旅籠』から、紅殻町へと迷い着くに至った因である、紅色の酒を求めてとあるオークション会場に潜入する、と。

それでは、秘密めかしたその競売場（オークション）は、なにでできている？

仄暗い桟敷を巡らせた小ホールと。

華麗なシャンデリアと、背もたれと座面を金襴緞子で覆って詰め物した木椅子の列と。

そして競りの開幕を告げる、飾り時計の一点鐘（零時半）と壮麗な伴奏と。

だからそれらの要素を求めて、十湖は巡る、青年と琵琶法師を連れて巡る、巡る巡る、眠る者達の夢の連なりを、次から次へ。

華麗な桟敷を巡らせたホールは、とある歌姫の夢の中に見つかった。彼女は眠る、夢見て眠る。何時かの日、独演会を行ったそのホール、かつてのグランドキャバレーを改装した、戦前のモダンを現代に残すホール、鶯谷の小劇場の情景は、今もありありと歌姫の夢寐（むび）にと投影されて、十湖達はするりと滑りこむその夢の中。懐かしくも美しい、その小劇場の情景を、十湖は手づかみにして革の小袋の中に落とし込む。

「おい十湖、これは、一体なにを……っ」

次は華麗なシャンデリアと、豪奢な詰め物の木椅子の列だ。こちらは古き佳きハリウッド映画をこよなく愛好する、老人の夢に映し出されていた。若き日の姿に立ち戻って、長く連れ添う糟糠の妻と共に、とあるパーティ会場のシャンデリアの灯りの下、シャンパンのグラスを秘やかに、けれど誇らしげに乾杯していたところ。十湖はこの老人の一時の幸せな夢、も手繰りよせて革の小袋の中にしまいこむ。

「あの、いいんかな、これきっと、誰かの夢なんだよね？　それ、取ってっちゃうってのは……」

大それた盗みでは、と物怖じして琵琶法師は十湖の袖を引いたものだし、宮里青年も苦りきって、眠る者達の夢と夢とのあわいで、とうとう足を止めてしまう。

眠る人々の、それぞれ見る夢と夢との狭間は、星空のただ中に張り巡らされた無数の渡り廊下、そのように三人には認識されてあり、宮里青年と法師にとっては、川面の光の帯の中に叩き落とされたとみればこの渡り廊下の連なりの中にあったという訳なのだが。

「あんね、その競売場ってな、夢と現の狭間にあって、でもどっちかっていうと夢に寄った場所で。だからこうやって夢の要素を集めて道標にするんだけど」

「大丈夫、一晩の間借りるだけなんだ、これは。事が済んで、革袋をゆるめたら、ちゃんとそれぞれの夢はそれぞれの人へと戻っていくよ。ていうより夢を盗るなんて事しでかしたら、砂男（サンドマン）に怒られちまうし」

「だからその砂男っていうのもよく判らん」

「一つの物語の住人。擬人化概念体。夢の王。眠りの神。そしてあたしの旧い知り合いの一人。今回必死こいて頼みこんで、夢の砂粒を借りてきたお方」

「とにかく、今はあんまり時間がないんだ。夢の砂、借りたっていっても一晩かぎりの制限付き、夜が明けるまでに、残りの要素、集めないと、元の木阿弥になっちゃうんだ、智久君」

「……今までの夢、借りてきた人達には害はないんだな？」

重ねて真剣に、念をおせば十湖も、いつになく生真面目な面持ちで頷き返して、それを青年は信じた。なら、と青年は肩の力を抜いたし、法師も二人のやりとりを見て、こちらはあからさまに安堵の吐息を、三人の緊張がかくほぐれたところに。

渡り廊下の遙か彼方より、遠く、幽かに、けれど美しく澄んで荘重に、響いてきた鐘の音がある。一つ。それを三度繰り返して、きっとそれは、どこかの大時計の一点鐘。それを耳にして十湖は、ほっと眉を下げて、

「ああ、時点鐘は探すまでもなく、どこかが寄越してくれた……でもどこから？　ううん、この方角はきっと、『旅籠』から——」

呟くなり十湖、チューブトップのジッパーを下ろして張りに張り詰めた乳房を露わにしたのには、青年大いに面食らったという。

「なにを、いきなり脱ぎだす!?　君って奴はどうしてそう行動に脈絡が無い……っ」

「だって一点鐘が鳴ったら、競りがじきに始まるんよ。だから着替えんの。競売場はドレスコードって奴がやかましいからね。ほら、智ちーも急いで、持ってきた衣装に、すぐに！」

青年の眉が疑問符の形にしなったけれど、十湖の声音には有無を言わさぬ力が籠もり、気圧されたように宮里も、シャツのボタンに手を外し掛けて、そこで。
「んー……このガーターストッキングてのは、パンツの上から留めるのか下を通すのか。智久君、おせーてーな」
「知ってて見せびらかしに来るなっ。君が自分で用意したんだろうが白々しい。それに上か下かで言えば、見映えを重視するなら上から、実用を取るなら下だっ」
突き放すのにもご丁寧に説明をつけたのはこの青年ならではだが、閉口する宮里の視界の端、自分達以外は何者もないと思われていた、この夢の通廊に動く物の影、ありて来る、廊下の彼方よりこちらへと走り来たる。
それは黒い彗星、それは艶やかで偉大な黒の毛皮と筋肉の躍動、大きな大きな黒猫の。認めて、声を漏らしたのが宮里と法師の同音異口の。
「宗右衛門!?」「あれ、宗右衛門さんだ！」
山猫ほどもある大きな黒猫の、近寄るにつれ、なにか咥えているのが徐々にはっきりと。かさばる布袋を、三人の傍まで駆け寄るとごとりと下ろした。
「法師、君、宗右衛門を知っている？」
「うん、でもそっちだって」
「宗右衛門さんはどこにでも自由にいるし行けるって事だよ、あんま気にしないよーに。それでなにを持ってきてくれたのかなー？」
布袋を解いて改めて、十湖は、ひゅ、と驚嘆の口笛を軽く一つ、それから法師へ優しげな眼差しを向けて見せたとか。
「なに……なんかな、十湖さん……」
「どうやら向こうにも、君の帰りを望むひとがいてくれてるって事だよ、法師ちゃん」
十湖が取り出して示したのは、一振りの古ぼけた木槌の――

◆　◆　◆

そこは、長く、そして経てきた歳月のうちに滑らかに磨き抜かれ、物柔らかな沈黙を横溢させた、木造、板張りの廻廊の突き当たり、ちょっとした広間のようになっている一画で。差し掛けられる弱めの明かりの輪の中でそれは、壮麗であった。精緻であった。巧妙であった。その前に並んだ二人の背丈よりもまだ高い、古い、かつ時代を越える磁場さえ宿すようなそれ、巨大な柱時計。
真夜中過ぎの『旅籠』の一画、柱時計は零時半の一点鐘と、それに伴う華麗な奏鳴を紡いだばかり。並んだ二人の一方、小柄な姿は、長く艶やかな黒髪と黒い瞳の、旅籠を守る管理人の一族の最後の裔、令嬢の、黒猫宗右衛門が潜りこんでいった、柱時計の裏蓋に置いた眼差しは物想わし気な。
「……宗右衛門さんのことだから、心配はないと思うのです、けれど」
「それでも、心配は心配だな」
「……本当なら、私が届けにいって差し上げたいのですが」
「俺だって同感だ」
青年、築宮清修は令嬢に、心配事を共通させる者特有の連帯感で同意するも、けれど渡し守は、『旅籠』の様々の不思議に通ずるあの女は、この度の件はそれ以上の干渉はならじと、そう告げていて、だから二人ができるのはここまで。
令嬢が旅籠の懐奥深くに見出していた、この壮麗な柱時計の下まで赴いて、司書が彼女の所蔵資料のうちより持ち出してきた、古ぼけて粗末な木槌を黒猫に託すことのみ。後は、待つだけ。一点鐘を鳴らした柱時計の傍で待つだけ。
琵琶法師の、奏でる琵琶の音が、旅籠に戻ってくるその時を。

◆　◆　◆

乾！　と乾いて清冽な槌の音を、十湖が撃ちつけ鳴らしたのは夢の渡り廊下の柱で、だったはずだ。その鳴音の余りの鮮烈さに、胸の裡を一陣の烈風で一薙ぎされた心地で、青年と法師が目を瞑ったのも一瞬のことだった。
だというのに、次の瞬間。
青年は、薄暗い桟敷席からホールを見下ろしている自分を見出していた。
――そこは、仄暗い桟敷を巡らせた、華美なホールで。
そして青年が腰を下ろしているのは、金襴緞子の織物張って詰め物の施された、豪奢な木椅子で。同様の木椅子が、眼下の小ホールに列を為す。列席しているのは、いずれも盛装の、燕尾服やイブニングドレスの貴顕淑女ばかりと思しきが、彼らの輪郭は陰に沈んで判然とせぬ。吊られた豪勢なシャンデリアは、今は蝋燭の火はほとんど落とされホールは秘密めかした陰が濃く強調されていた。
「ここは、一体……」
唖然と漏らした言葉に応えて、傍らで身じろぎの、はっと見やれば十湖が隣、同様の椅子に座してホールを見つめていたところ。
「だから、競売場だってば。ここに来るために、あんなにあれこれやってたんだから」
「そう言われてもな」
夢から夢を渡って掻き集めた、情景の要素の数々、それらが木槌の音によって統合されて現出されたと、十湖はそんな理屈をぶったけれど、俄かには信じかねる青年である。ただそれでも、青年の感覚は競売場の桟敷にある自分をしかと認識してあり、これは夢か現かと問う事自体が馬鹿馬鹿しくなるくらいの、彼にとっては『事実』なのであった。影の中に浮かび上がって否応なしに目を惹く、ドレスに着替えた十湖の、襟のくりの乳房の谷間から視線を逸らして、周囲を探り宮里ははっと息を飲む。法師の姿が、見えない。
「琵琶法師、は……!?」
「あー、あの人の衣装までは用意できなかったかんね、とりあえず別の部屋に隠れてもらってる。大丈夫だよ、こういう建物には、隠れられる部屋なんて幾らでもあるもんだから」
「手回しがいいことだな」
それでも不安を拭いきれないでいる宮里の、囁きかけた口を封じるように、また高らかに打ち鳴らされる槌の音の、眼下のホールから。
『それではこちらの値で、落札（ハンマー・プライス）といたします！　おめでとうございました』
『それでは次の品のご紹介に移りたいと思います。こちらは前世紀きっての名工、スターム師の手になる天球儀で――』
宮里にしてみれば訳も判らぬまま放りこまれたけれど、競りはその熱もたけなわで、集った人々は感嘆の、満悦の、落胆の、それぞれの思いの籠もった囁き声や吐息、立ちのぼる人肌の温度でホールは全体が蒸されたよう。人々も一見して上品な物腰と見えて、ホールには確かな、現世的な物欲というのが横溢してある。
それに青年の察するところ、この競売場、正規の品ばかりではなく、後ろ暗い事情を秘めた品まで手広く扱っている風な。会場のあちこちに配された、人相悪くいかつげな体躯の男達、あれらはもし密偵や侵入者あらばその膂力に物を言わせて摘み出そうと待ち構えている者達だろう。豪勢、華美、それだけではない頽廃の匂いがこの競売場には漂っていて。
「なんだか、胡乱な気配が聞こえてくるような競りだな……十湖、ここにその……？」
「うん、今夜紅酒のボトルが並ぶって話なんよ。であたしらは、それを競り落とす――」
「君、こっちの通貨とか、持ってきてるのか？
しかも雰囲気的に、大金が動いているように聞こえるんだが」
「競り落とす――なんて真似、あたしらにできるはずもないから。品が壇上に出てきた瞬間に、横合いからそいつをかっさらう」
「おい!?」
目を剥いた宮里とは裏腹に、十湖は眼を細めて会場の推移と、壇上の司会の語りに注視の、その横顔に何時にない真剣で鋭い気勢漲って、どうやら本気でその略奪行為、目論んでいるのらしい。
「待て十湖、幾らなんでも無法に過ぎるそれは」
「黙って、智久君。今手口を考えてるとこだから。シャンデリアを叩き落とす……ううん、それだと下手すりゃ死人が出る……火を着ける……これもよくない、品がすぐに警備に引っこめられる……なら夢の砂か。上から一撒きすればみんなすやすや夢の中だ……後でＤｒｅａｍに、契約外の無償

の仕事、命令されるだろうけどしかたない」
　ぶつぶつと、十湖はどこまでも真剣に、やがて壇上に登るであろう紅酒をいかにして奪うか、沈思没頭の、もう宮里がつつこうが引っ張ろうが動かぬ態、確かに彼女は、荒事の予測も告げてはいたが、これはいよいよ覚悟を決めねばならないのか、いや決められたものか。十湖が剣呑な考えを練り耽り、宮里は煩悶し続ける、そんな二人を余所に競りはじりじりと進行していった――が。

◆　◆　◆

　宮里は、自分が犯罪行為に荷担しないで済んだことをまず喜ぶべきなのか、それともまた別の難事に出くわしていることを嘆くべきなのか、決めかねてつい天井の天使図を仰ぎかけたが。結局視線は長卓の遙か向こうの娘から、外すことはできなかった。
　馬鹿でかく、長い、船でも乗せられそうな程に長大な卓の主の席に座してその黄金の髪に灰色の眸の娘は、遠近法に則って小さく見える、のに強烈な存在感を放っている。驕慢にして権高、絵に描いたような貴族の令嬢なので。
「……っていう訳で、その『紅酒』をね、探しに来たんだ。それで」
「あの！　わたしら、お金とか持ってないけど、代わりにできる事、なんでもするから、だから」
「あ、法師ちゃん、こういう交渉事ではそう言う言質が取られたらおしまいな事、言っちゃ駄目ってーのに」
　口々に訴え、言い募る十湖と法師に、
「黙りなさい。下女と聞く口は持ち合わせていない。そしてそちらの、貴男。先程から黙ってらっしゃるばかりだけれど、貴男は貴男で口が聞けないのかしら？」
　二人を静かに、けれど強烈な言葉で遮って、金髪の娘は宮里に遣いた、視線には、青年が知る白皙のエミリアとはまた別種の貴族的狷介さが宿る。
　娘、ジョバンニ家令嬢。あの競売場が在するこの水の古都でも、由緒と格式を誇る貴族であるジョバンニは、先頃まで先代当主の没した後、令嬢の叔父、妾腹の男が専横をほしいままにしていたとか。しかしその叔父が不可解な病死を遂げてから、この娘が一切を統制し、往時の権勢を少しずつ取り戻しつつあるとかなんだとか。とまれそういう事情には異郷人として深く容喙するつもりはない宮里も、このジョバンニ家に紅酒が所蔵されている、となれば話は別、大いに別。
　……結局競売場では、紅酒は出品されなかったのだ。話が違うと泡を食ったのは宮里よりむしろ十湖で、会場が退けた後司会を拉致して青年が眉を潜めるような手口で締めあげて、聞き出したのが競りに掛けられる前に、このジョバンニ家の令嬢が圧力掛けてその掌中に攫っていったという顛末。だから十湖は走った、会場の別室に隠していた法師と合流し、都を縦横無尽に走る水路のゴンドラを一つ調達し、ジョバンニ家まで漕ぎ着けた。深更の、面会の約もないのに現当主である令嬢とこうして向かい合っているのは、十湖が強引に屋根裏から忍びこんだと、そういう経緯に拠っている。だが十湖も十湖なら、寝所に闖入されて、叫び声一つあげず、気丈な誰何と言葉短いやりとりだけでなにを察したのか、人を呼びもせず謁見の間まで通したこの娘も、どこかしら常軌を逸していたと言えよう。
「貴男。いいえ、名前はいいの。聞く気もないわ。ただね、気になるのは貴男のその髪と、眸の色。私、知っているのよ、貴男と同じ髪と瞳の娘を。そして私、その娘のことを、捜しています。ご存じなくて？　長い、真っ直ぐの黒髪で、夜の孔のような眸をしていた」
「教えてくれたなら、そのベニザケ？　譲って差し上げてもよろしいわ」
　まさに藪から棒、と言う奴で、譲るという、その言葉には跳び上がりたいほど嬉しい、にしても突きつけられた条件には宮里、少なからず面食らった。
「そのように仰せになられても。自分の国では、皆自分のような髪と目の色で――」
「御託は要らない。知っているのかいないのか、それだけを答えなさい」
　また皆まで言わせず、この娘、よくよくそういう人に下知する物言いに慣れてある。
（そう言われてもな……十湖、俺はそういう女の子と言ったら、白子の事がまっ先に思い浮かぶんだが、違うよな、これは……）
（うん、多分……あ。もしかして。でもなんで、このお嬢様があの子と――）
（なんだ、君は知っているのか!?）
　囁き交わすうち、なにか腹に含んでいるような十湖の呟きに青年が身を乗り出した、その横で。答えたのは、二人ではない、法師だった。
「それ、たぶん、お嬢さんのコトなんじゃないかな……？」
「なっ、法師、君、こういう人に軽々しくそういう推測を」
「黙りなさい、貴男。リュート弾き、聞きましょう。その方の事を。ただし違っていたなら、もうこの会見はこれきり。警邏の者にあなた方を引き渡して、おしまいにするから」
　薄氷（うすらひ）が張るような、そんな空気がジョバンニの娘と法師の間に張り詰めて、事の推移に言い難い緊迫感を覚えた宮里をよそに。
「ここのお屋敷、なんて言うのか、凄い時計があったところだよね？　今はお宿にあるんだけど、その時計。
　でも何時か、お嬢さんが話してくれたんだよ。その時計は、お宿と同じに、水路がいっぱいある街の、お姫さまのお家から貰いうけてきたって」
　今度顔色を変えたのは、ジョバンニの娘なのであった。

◆　◆　◆

　どういう仔細があったのか定かではない。ただ『旅籠』の令嬢と、こちらのジョバンニの娘との間に因縁があったのは事実らしい――いや、事実なのだろうか、法師の語った話によると、令嬢自身がかつてこの都にやってきた事を、夢か幻のように捉えている節があるそうで、それでもジョバンニの娘の語る特徴はまぎれもなく令嬢を指して、だから。だからその、ラベルも飾り気もない硝子壜に封入された紅酒は、今は法師の手の中に収まっている。
　水の都の煉瓦造り、歳月を閲したアーチ橋のその袂、眠たげにひたひた水が揺れる、水路の際、夜明けの仄明かりが満ち始めたそんな頃合い。法師は、壜の封を切って、十湖に言われるがままに一垂らし、ほんの幾許かだけを水路に紅色の雫、滴らせれば。水面から湧き上がった靄は、ただ朝まだきのそれと言うには妖しいほどに濃く、幾らか紅色を帯びてあり、そして宮里青年にとってはその靄の色、幾らか青味を帯びているとも見えたのだ。あの紅殻町の珍奇物品が不思議を為す時に現す、紅色の中に青らんだ艶を帯びる時のあの。
「これで、何がどうなるというのかしら。こんなまじないになんの意味が」
「しぃ。黙って。聞こえない？」
　三人に紅酒を譲り渡すに留まらず、この場までついてきて、不審の色を隠そうともしないジョバンニの娘を十湖が遮ると、たちまちその眉が怒りに跳ね上がったけれど、その時に聞いた、三人とも耳にした。薄紅の、薄青の靄の向こうから伝わってくる幽明の響き、軋む、それは櫂が軸受けに擦れる音と宮里は聞いて、とたんに法師の表情が、はっと朗らかに明るんだ。
「あれ、あの音！　渡し守さんの、お船の音だよ！」
　果たして、靄をかきわけて、水路を渡ってきたその輪郭は、滴らされた紅酒の香気を頼りとして、漕ぎ寄せられたその小さな屋形船は。
　それは、かげろうの彼方よりの便り。
　船頭は、墨染の僧衣をまとい、割れた般若の面を着けた不思議な女。
「ようやく、繋ぎがつきましたねえ……。
　人見の姐さん、そして紅殻町の学生さん、
　この度はほんにお疲れ様だった」
「法師も、よっくとお礼、言うがいい、ね？」
　異様で、けれど美しいその船頭の言葉に、宮里も十湖も、ようやく一つの物語の終わり、それも無事な落着を実感した事である。

◆　◆　◆

　ほろん、ほろん、と水路には琵琶の音が名残深げに漂って、見送る宮里青年と十湖に、尽きぬ想いを物語る。他には礼のしようがないからと、琵琶法師のただ一つの芸、奏でる琵琶の音は、その方面に素養の薄い青年をして、心蕩かしそうなほどに巧みで、深い情けに満ちていて。
「さすがに、名前だけの事はあるやね……聞き惚れる余り、こりゃうっかり水路に落ちちゃいそうだ」
「同感だな。しかしいいのか、ジョバンニ家のご令嬢。あんな、家人に何も告げず一緒に乗っかっていって……」
　青年の訝しむ通り、ジョバンニの娘は捜し求めていた娘が旅籠の令嬢その人だと知り、結果法師の送り船に同乗を強弁するに至った。
「さてね。ま、渡し守が許したんなら、それはそれでありなんでないの――そんな事より、智久君」
　十湖、すっと宮里青年に寄り添って、彼の胸元にもたれたその身のこなしは、何時もは性に奔放で直接的な情交ばかりを求めるきらいのある彼女にしては、柔らかく、物静かで、だから青年も突き放しもせず、受け容れた。
「あたし、今回結構働いたって思うんだよね」
「ああ。実際よく手を尽くしてくれたって思うよ」
「ならさ、ちょっとだけ、ご褒美ほしいかなあ、なんて」
「俺にできる事ならば」
「うん――君にできる事。
　踊ろ、あの人の琵琶の音、聞こえているうちに。
　ワルツとかじゃないけど、こういうのも佳い」
「俺はダンスなんて、よく知らないが」
「いいんだ、くっついて、体を揺らしているだけでも、さ」
　――夜と朝との狭間の時間。それは夢と現の合間の時間。
水の古都の水路に映る影は、二人で一つの、ゆるやかに、情趣纏綿として、睦まじく。
「言い忘れてた。十湖、君、そのドレス。
　とても似合って、素敵だ。見ていて眩しいな。
　正直驚いた」
「驚いたってのが、なんかアレだけど。嬉しいよ、そう言ってもらえて。でもこの局面でそれ、さらりと口にするってのは――」
　言葉の後ろは声にせず、青年の胸に頬寄せて、唇だけで囁く。
（ずるいなあ、ホント。智久、このタイミングで。君、やっぱりジゴロだよ）
「何か聞き捨てならぬ事、言ってないか？」
「なんでもなぁい。智久君こそ、どこのパーティに行ったって大モテだよ、そのタキシード姿」

◆　◆　◆

　――ほろん、ほろんと琵琶の音は、現と夢の境の水の都を越えて遥か彼方、紅殻町の、青年と娘の帰りを待ち続ける女達の傍らにも届こう。その琵琶の響きに女達は、かげろうの彼方から迷い人に追慕の想いを馳せて、そして。
『旅籠』へと戻る船の上。土産に渡された風呂敷包みを解いた時、中に収められていた、あの、紅殻町で着せてもらった洋服と、琵琶の真新しい手入れ道具一式を目の当たりにして法師もまた異郷の地の、恩人達の姿を思い出し、こらえきれずに零した、その涙――
　法師はその時、涙しながらも、微笑みも浮かべていたのだった。万感の思いの籠もった。

――カゲロウからの迷い人・了――




年末に
ReBORN
無事発売
出来ました
手に取って
頂いた皆様
有り難う
ござい
ま
ReBORNと
言えば
とにもかくにも
フルボイス
よっしゃ
おめでとう
俺たち！
なんだか
すごく
むさい
図だね…
別に全然
さみしく
なんか
な
ギャ



ほら
増えた声(ボイス)のかなりがメアリ嬢だし…
退屈をさせてしまったようだね小さなお嬢さん
Toffee Apple
なんだか悪くないね
そんなわけで
スチームパンク
Fullvoice ReBORN
めいっぱい発売中！

■斜塔編

～三重の塔～

「じゃあ、みんなでバウムリンデを取り返しましょう！！　あたしのビンタ回避の為に！」
「最後にもう一回、考え直してみるのもいいかもしれないわ」
「マイさん、なにいってんですか。取り返さないとあたしがビンタされるんですよ？　ヘタしたら連帯責任で全員ビンタかもだし」
「だからこそ今一度、冷静に考えるべきね」
「マイの海関、お言葉ですが大学女雪相撲は常在戦場。あそこまであからさまに挑戦状を叩きつけられたのに戦わなければ、ビンタどころではすまされないかもしれません」
「おい豆斯波、面倒だからさっさと入ろうぜ」
「うっス！」

～第１階層～

みんなで心を一つにして塔の中に入っていったの。そしたらさぁ……。

「うわ、なんだこれ。酒くせー」
「いらぁっは～い♪」

いたのは一人。酔っぱらい。

「あんたまだ未成年じゃないの！？　なんで酒なんて飲んでるのよ！！」
「バウムリンデ食べたのかしら」
「洋菓子だからお酒入ってると思いますけど……あんなになるほどなんですか？」
「私も前に食べたことがありますけど、普通のお菓子とは比べものにならないほどのブランデーの量だったわ。お酒に弱い人だったら、ああなってしまうかも」
「よし！　じゃあシバちゃん頑張って！」
「自分っスか！？」
「なんで豆斯波断定なんだよ」
「だってシバちゃん、いっつも酔っぱらいの相手してるじゃないですか」
「お？　その酔っぱらいってアタシのことか？」
「そ、そういう意味じゃないですけど……その……この先、もっと強そうなのが出てくるかも知れないじゃないですか。だからここはシバちゃんをぶつけて様子を見た方が」
「あー、そーだな。負けたらどーせビンタが飛んでくんだし、トータルで勝ってかねーとな」
「そういうことです！　別に三ツ葉さんがナチュラルに酔っぱらいだなんていってませんから！」
「あぁん？」　**ビシャン！！**
「にゃうっ！！」
「よし行け豆斯波！」
「ちょっと待って！　ここは私が行きます！」
「やー、マイは温存温存。もっと強そうなのにぶつけるから」
「獅子はウサギを狩るのにも全力を出すといいます。ここは……私が！　私が勝ちをもぎ取ります！！　負けたりなんていたしません！！」
「な、なんかスゲー気合い入ってんな。んじゃ、マイは余計に温存しねーと」
「え……」
「代わりに自分が勝ちをもぎ取ってくるっス！」
「え……ええ……頑張って……」
「よ～し♪　蝶子もがんばっちゃぅろ～☆」

マイさんの気迫が普通じゃなくてさ！
これなら次の階でマイさん出して、最悪シバちゃんが負けても１勝１敗だな～とか思いながら２階に上がったの。
２階は……梅ちゃんっていったかな？

～第２階層～

曽祖父母の会社を引き継ぎ、一年中世界を飛び回っていた両親。
いつも一緒にいてくれたのはお祖母様だけだった。
私の全てを認めてくれたお祖母様。
私の全てを否定したお祖母様。
「お見事です、よく出来ました。でももっと上手くできるようになるから精進しましょうね」
私は頑張った。
勉強も。
女雪相撲も。
私は女雪相撲小学生高学年の部で全国優勝した。
「お見事です、よく出来ました。でももっと上手くできるようになるから精進しましょうね」
お祖母様は私を認め、そして否定した。
中学時代、私は地区予選決勝で手を抜いた立合をした。それでも私は勝った。
その日、初めてお祖母様にビンタをされた。
「真剣勝負で手を抜く非礼を知りなさい！」
私が泣いても許してくれなかった。
それからお祖母様は、私を否定し、認めるようになった。
「まだまだ未熟。でもよく勝ちました」
高校に入り、ダリアと同じクラスになった。ダリアは地区予選決勝で私が手を抜いて勝った、その相手だった。
「あの時に舐められたのが悔しくて悔しくて。んで、ちょっと頑張って、ばーちゃんに稽古つけてもらったんだ♪」
ダリアは強くなっていた。
私よりも。私が追いつかないくらいに。
私は女雪相撲に打ち込む時間を勉強に費やすことにした。
全国一位になる為に。
お祖母様に否定されない結果を出す為に。
今、若きお祖母様が目の前に立っている。
私は勝たなければならない。
勝てばお祖母様に認められる。
勝てばお祖母様に否定されない。
私は、自分の目指す自分に辿り着ける。
お祖母様を……倒すことで！！

「さささささぁこぉぃいぃいぃいぃい……」
「三ツ葉さん三ツ葉さん、あのメガネ、マイさん見てビビってますよ？」
「だなー。こりゃマイがワザと負けたりしない限り勝負になんねーぜ」
「あんなビビりメガネが相手ならシバちゃんでも余裕で勝てそうですよね。今から１階と２階、交換しちゃいましょうか」
「それアリなのか？」
「どうなんですかね？　なんか格好悪い気もしますけど」
「んじゃこのままでいいか。豆斯波も酔っぱらいに負けたりはしねーだろ」

～第１階層～

「ねぇねぇ～一緒に食べよぅよぅバウムリンデぇ～ん♪」
「まだ立合前っス！　抱きつくのはやめるっス！！」
「じゃぁ一緒に食べよぅ？」
「自分はそれを取り返す為に来たっス。食べるわけにはいかないっスよ。それに……これ以上食べさせる気もないっス！」
「う～、この人怖い～。蝶子泣いちゃう～」
「泣いても許さないっスからね」
「いじわるぅ！　もぅ蝶子ぉ本気出しちゃうんだからねぇ！！」

～第２階層～

「どどどどうしたどうしたあぁあぁあ……」
「……ん」
「ひっ！」
「……何かしら、この気配」
「なななにをああ焦ってるるるる。わ私のとと闘気におおお恐れをなしたかぁあぁあぁ」
「ごめんなさい。貴女ではないみたい。どうも下から……」

「あれ？　マイさんどうしたんだろ。なんか下見てますよ？」
「……よかったな侘助」
「何がですか？」
「あの下の酔っぱらい、ただの酔っぱらいじゃなかったみたいだぞ」
「そうですか？　なんかアホっぽいただのガキにしか見えませんでしたけど」
「ヘタすりゃ小百合よりつえーぞ」
「まさかー♪　冗談はゲームだけ……」
「うらっ！！」　**ビターン！！**
「にゃふん！！」
「……あとは豆斯波を信じるしかねーか」
「ううぅ……痛い……痛い……」
「んじゃアタシらは３階行くか」
「痛い……痛い……」
「へぃやっ！！」　**バチーン！！**
「ぎゃうっ！！」
「まだ痛いか？」
「……も、もう痛く、ありません」
「んなら３階行くぞー」
「ど、どすこい……」

～第３階層～

「蝶子と梅を倒してここまで来るとは、さすが大輪女子の女雪相撲部ね。とりあえずは褒めてあげる」

「え？　倒して来なきゃダメだったの？」
「え？　蝶子からルール聞いてなかったの？」
「うん。蝶子ちゃんって１階の子だよね」
「うん。そうだけど」
「バウムリンデ食べて酔っぱらってたよ？」
「あぁもう蝶子のやつー！　だから食べ過ぎるなっていっておいたのに！」
「よーし侘助ー。倒してくるルールなら１階戻って、総掛かりでボッコボコにしてこよーぜ」
「ダメダメ！　総掛かりとかナシ！　そういうルールでもないんだから！！」
「っせーなー。ルールルールって。あんま調子にのってっとアタシのルール適応すんぞ」
「あ……う……」
「んで？　このまま続けていいのか悪いのか、どっちだよ？　あ？」
「こ、これで……いい、です」
「だったら最初っからゴチャゴチャいうんじゃねーよ。なー侘助」
「ホントですよね。でもダリアちゃん、まだ高校生らしいんで」
「だから？」
「ゆ、許してあげたら、どうかなぁ、とか……おも……て……」
「ガキを甘やかしてっとロクな大人になんねーんだよ」
「……で、ですね。ほらダリアちゃん！　早く謝んなって！」
「ご、ごめんなさい」
「んじゃ侘助、いくぞ」
「え？　いくぞって？」
「二人でボコんだよ」
「そ、それはちょっと……さすがに高校生相手には……」
「あ、あの、身勝手ながら１対１の女雪相撲で……お願い、できれば……」
「だから最初っからいえっつってんだろ？」
「す、すすすみませんすみません」
「三ツ葉さん、あんま高校生脅かしちゃかわいそうですよ」
「アタシが悪いのか？　ハッキリしねーコイツがわりぃんだろ？」
「すみませんすみません……あの、すみませんついでに……できれば大杏関と立合たいんですけど……よろしいでしょうか？」
「大杏？　んなのいねーよ」
「え？　でも大輪女子に……」
「いねーっつったらいねーんだよ」
「す、すみませんでした。じゃあ、三人の中からどなたか一人……」
「三人？　……あ。あー……ごめん」
「あたしも、います……一応……」
「雛菊もいたんだよなー……静かだから忘れてた……」
「三ツ葉さんひどいですよ、それ」
「っせーなー。だから謝っただろ！」　バシーン！
「グハァッ！」
「ほら、侘助」
「ど、どすこい？」
「オマエ行ってこい」
「あたしですか？」
「オマエが連れてきたんだろ。オマエがケリつけろよな」
「……どすこい」

って感じでさ、『ここはあたしに任せてください！』って名乗り出たの！
だってあたしがダリアちゃんを連れて来たんだもんね。先輩達に尻ぬぐいさせるなんて出来ないから！！
え？　結局、どっちが勝ったのかって？
もうヒロくんったら、せっかちなんだから☆

どっちが勝ったかっていうとね……。

■みんなでどうにかしよう！　女雪力士物語

無事に三重の塔へ乗り込んだ大学女雪力士達。彼女たちの戦いの結果を決めてしまおう！
今回の募集項目は以下の通りです。

１：第１階層で勝つのはどっち？

蝶子か豆斯波、どちらが勝つか名前を明記しよう！

２：第２階層で勝つのはどっち？

梅かマイ、どちらが勝つか名前を明記しよう！
みんなの熱い回答を待ってるぞ！！

※回答結果は次回の当コーナーに反映されます。各項目とも投票数の多い結果を採用します。
※このコーナーでは基礎投稿点１点の他、今回は回答１項目につき２点が加算されます。



『1907：すてきなふく』

■1902年、某月。コネチカット■

——コネチカット州。私立制高等学校にて。
教室で自分の机の上に幾つかの雑誌や新聞の切り抜きを綴じたファイルを広げたヴィヴィの得意そうな表情に、はじめ、年若いエリシア・ウェントワースは気付くことがなかった。一体何をしているのだろうと首を傾げて、同じように意図に気付かない風なセルヴァンと丁度ぴったり動きを合わせる形になって。首を傾げて。頭の上に疑問符をひとつ、ふたつ、みっつ。
「なあにヴィヴィ？　それ？」
「エリィ、あなたまた話聞いてない……まあいいわ。うん。これはね、あたしが今一番好きな女優さんの記事や写真を集めたものなの。前に話したら、見てみたいって言ってたでしょう」
「へー。綺麗なひとだなあ流石女優」首傾げたまま、セルヴァン。
「あんたも見たいって言うから教室に持ってきたんでしょうが」
「へ？」「そうだったかしら」「そういやそんな話も」「え、え」
「と、も、か、く。これがその女優さんの写真。最近は映画（キネマ）にも出てるのよ。歌手の活動もしてる売れっ子中の売れっ子」
「お名前は？」エリシア、やっぱり首を傾げたまま。
「ジンジャー・ロジャース。前に言ったんだけどなぁ」
「え、えと」
そうだったかしら、言われてみれば確かにそんな話を聞いて篆刻写真を見たいわと呟いたような記憶がうっすらと。思いながら、エリシアは机の上に広げられた沢山の写真を見る。
美しい女性だった。流石は女優さんねと思う。国や時代を自由自在に渡るかのように数多の衣装、写真ひとつごとに着ている服が違っていて、欧州の貴婦人のようなドレスから、合衆国の町娘、果ては古代エジプトの王族を思わせる古代オリエント風の服装まで枚挙に暇がない。舞台のものか映画のものか、どれが女優としての衣装でどれが歌手の衣装なのかはわからないけれど、どれも共通して綺麗で美しい。ちょっと眺めて見ただけなのに溜息が漏れてしまいそう。
「わぁ、きれい」あ。溜息。少し漏れた。
「でしょ。最近は特に女優としては役柄に幅が増えて、歌もどんどん出してて、東海岸一のスタァって評判もあるくらいなんだから」
「へえー。すごいもんだなあ」
写真を何枚か手に取って頷くセルヴァン。
と。不意に、その動きが止まってしまう。３枚目の写真を目に留めるや否や彼はぴたりと止まってしまった。その首筋に汗の玉が浮いたことに勿論年若いエリシアは気付かないものの、ヴィヴィはと言うと当然のように気付いてしまう。
「どしたの」
「い、いや、なんでも」
「見せてみなさいよ」ぱっと手から奪い取って一瞥。「あ、ああ……こ、これかぁー……これは……ねぇー……う、うん。そうね」
心なしかヴィヴィの頬が赤いような。
どうしたのだろう？
「どうしたの、ヴィヴィ」
「う、うーんなんでも」
「ふふ。セルヴァンと同じこと言ってる」
言いながら、エリシアはひょいとヴィヴィの隣に回って写真を覗き込む。新聞の切り抜きらしいそれは、勿論白黒ではあるのだけれども絶妙に陰影の写し方が優れていて、立体感を伴ってエリシアの菫色の目に映る。ドレスを纏ったジンジャー・ロジャースの姿。無数のコインで形成されたドレスは、前衛的ではあったものの、綺麗なものとしてエリシアは捉える。きっと舞台や撮影機材の照明を受けたらコインの一枚一枚がきらきらと反射して美しく映えるんだろうな、と。
「きれい」
「え」
「え」
「とってもきれい。コインのドレスなのね、すごいわ」
「すごいけど」ヴィヴィの表情が微妙に歪んでいる。「で、でもこれ、ちょっと大胆っていうかその浮いてるっていうか変っていうか、多分これパトロンの誰かがセンスも何もなくキラキラしてるからいいって思って無理矢理彼女に着させたとか、そういう類のものよ絶対」
「ううん、きれいよ」
まばたきを何度か。
ヴィヴィは何を言っているんだろう。セルヴァンも目を白黒させて顔を赤くしたり青くしたり。変なんかじゃないのに。こんなに、いいえ、照明を受けたらきっととても綺麗に輝くのに？
「それに、か、かなり露出もすごいじゃない？」
「う、うん。俺も露出多いのは嬉しいけどこれはちょっと。だって中世の鱗鎧（スケイルメイル）みたいになっちゃってるだろこれは」
「すけいる？」
「腹のとこなんて花か太陽みたいになってるぞ」
「素敵だと思うの」
「エリィ、あなた……」
ヴィヴィが溜息がちに呟く。
このぶんだと、この子が恋い焦がれている彼相手にでも同じことを言ってしまいかねない。それはそれで自分から何かを言うのは良いことではあるのだけれど、この破廉恥かつ奇妙きわまるコイン・ドレスが話題の中心というのはいかにも良くない。彼も相当の変わり者ではあるのだろうとヴィヴィは見当を付けているものの、それはそれ。これはこれ。女性のほうからこんな大胆な露出の、なおかつ奇妙、というかやっぱり有り体に言って“変”なドレスを素敵と言うのは。
「……こんなの着たいなんて言っちゃだめだからね。先生に」
「素敵なのに」
「だーめ」
「ええ……」しょんぼり。
「そんな顔しないの。それよりエリィ、こっちの、お洒落なスーツ姿なんてどうかしら。これならアラン先生に見せても問題なし」
「あ、こっちも素敵」
「お前なんでも“素敵”なんだなあ」セルヴァンが笑う。
「そんなことないわ」
頬を膨らませて、エリシア。
何でも素敵だと思うことはないと思うけれど、ただ、嫌いなものが殆どないだけ。目に映るものの多くが好きに思える、だけで——

■1907年、某月。地下ブロードウェイ■

——それは、少女が紫影の果てへと辿り着く前の出来事。
——それは、黄金の鋭が世界に顕れるよりも前のこと。

地下世界マンハッタン。ブロードウェイ。
朽ちかけた劇場にて。
男たちは視線を交わすことなく言葉だけを交わしていた。
女たちはいない。ブロードウェイを案内するわと言ってジンジャーはリリィと共に劇場の外へ出た。だから、ここにいるのは、照明の消えた舞台の上にいるのは男だけ。サム・ショーターと、1輌だけの地下鉄の車掌。女はいない。故にこそ男たちは言葉を交わす。
視線を交わすことなく。
「随分と」
声。言葉は舞台から客席へと響き渡る。僅かな音であるのに。
「随分と、独占欲の強い男だな。お前は」
「欲求など僕にはない」
サムの嘲りに車掌、Aは間髪置かずに返答する。
迷いのない言葉ではあったが。
「へえ？」
「残念なことに、僕は、きみたちとは違う」
「何と違うのかな」
「人間（きみたち）とは違う」
事実だけを口にする。
車掌は嘘を吐くことがない。
ただ、あるとすれば、事実を隠すだけだ。それもあの翠の服を着た少女に対してのみ。地下世界の命なき鉄（メタル）の人々に対して嘘や隠し事をすることはない。ないはずだった。
「人間じゃあないか。成る程。確かにお前はそうだろう。だがそれは俺たちもそうなんだろうさ。忘れられた地下世界で蠢く鉄だ」
「それは」
事実ではあった。
車掌は人間ではなく。サムもまた正しく人間ではない。
地下世界の主が決めた事実。
嘲笑する神王が定めた法則。
「そうさ。じゃあ、俺たちは何だと思うね。空っぽ頭の車掌さん」
「きみは鉄だ。確かに。僕は、ある種の演算子による数式の像だ」
「違うね」
吐き捨てるようにサムは言った。
ピアノに黒い指が触れる。高い音が響く。
朽ちかけた劇場には、このブロードウェイ・エリアを5年前に襲った無数の“切断”の現象の傷跡が残っている。この劇場の破損具合は他の大劇場に比べれば比較的ましなほうではあるが、それでも、座席の幾つかには“切断”の痕が未だに。故に、音は、美しいと表現できるほどの反響をもたらさない。
ただの高い音だ。
「俺たちは同じだ。嫉妬もする。独占欲だってあるさ。惚れた女に近付く男は、どんな奴だろうがみんな敵だ。死んでも、鉄になっても、数字の羅列であろうとも、それだけは変わることがない」吐き捨てるように「煉獄へ至っても変わらない」
意味がわからないといった風な車掌へ、サムは応える。
自分と彼とを嘲り続けながら。
「……男なんだよ。ガキなんだ。俺たちは、どうしようもなく」



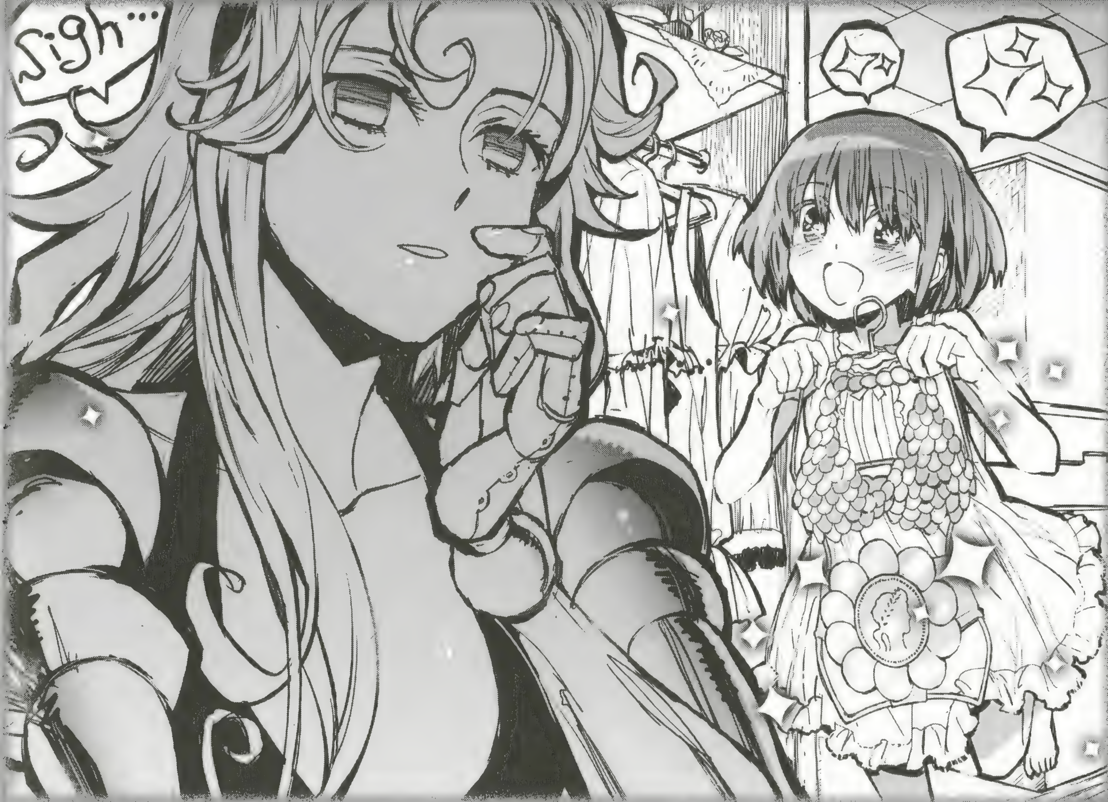
■1907年、某月。地下ブロードウェイ■

「わ、わ、わ！　すごい、こんなにいっぱい服がある！」
「もっと大きな劇場に比べればそれほどじゃないのだけれど、ごめんなさいね。大劇場の多くは朽ちてしまっているから」
「地下鉄のクロゼットよりすごい！」
「地下鉄？　クロゼットがあるの？」
　サムと彼が話しているのとちょうど同じ頃。
　劇場内部。ジンジャー・ロジャースの控え室。
　リリィ・ザ・ストレンジャーは目を輝かせてそれらを見ていた。大きな大きなクロゼットが幾つかと、そこにぎっしりと掛けられた無数の舞台衣装。正しく言えばそれほどぎっしり詰め込まれている訳ではなくて、通気をきちんと考えて納められているのだけど、リリィからすると、そう表現できてしまいそうなほどに沢山たくさん。
　わあ、と口をぽかんと開けたままリリィは固まってしまう。
　こんなにたくさんの服、服、服！
　１輌だけの地下鉄に備え付けられたクロゼットにも沢山の服が掛かっていたけど、その比ではないくらいの服。服。服。あと、服と言ってよいのかどうか。ドレス？　見た目の華やかなもの、見たことのないようなもの、知らない国や知らない時代のものなんだろうなと思えるものもあるけれど、一体どういう場所でどういう用途で着るのか想像もつかなかったようなものが、幾つも、幾つも、幾つも。
「すごいね……」
「これで全部という訳でもないのよ。でも、それなりにはね」
　ジンジャーは少し恥ずかしそうに微笑む。
　理由にリリィは思い当たらない。それも、そのはず。素人であるところのリリィには無数の衣装と大きな棚は魔法のように見えているものの、ジンジャーには少し違う。ブロードウェイ全域を５年前に襲った“切断”の現象や、その直後、地上から地下世界へと“落ちて”しまった時にかなりの量の衣装が失われてしまっていて、そもそもこの劇場も何度か使ったことはあるものの、５年前当時にはもっと大きな劇場での公演を行っていたから。実質的には自分たちの持ち劇場と言っても過言ではない場所で、だからこそ、それまでの舞台や映画で使った衣装を溜め込んでもいた。ここにあるのは、そこから持ち出すことのできたほんの一部にすぎない。だから、ここにあるものだけを自分のすべてとして見せてしまうのは、些か、自尊心としては切ないものがあるのも事実で。
　でも、そんなことはリリィにはわからない。
　だから、素直に感想を口にする。
　だから、素直に双眸を輝かせて。
「すごい」
　溜息がちにリリィは囁く。
　ジンジャーに言っているの？
　ううん、彼女にではなくて。幾つも幾つもある綺麗な衣装を前にして思ったこと、感じたことを口にしているだけ。
　こんなに服があったら、毎日着替えてもぜんぶ着るまでどれだけの日にちがかかるのかわからない。毎日違う衣装に着替えるたびにあの車掌の世話になるのかなと想像しかけてぐっとお腹の底に嫌な感じが溜まりかけるものの、気にしない。気にしない。
　この町に漂う“怒り”の感情にリリィは気付かない。
　それと相対するのは、今ではないから。

「えっと――」
　気を取り直して、リリィはよいしょと手を高くに伸ばしてひとつの衣装を手に取る。好きなものがあったら試着してみたら、とジンジャーに言われるや否や、さっきから気になっていたものを。よいしょ。思ったよりも重みのある衣装で、不自然に踵を上げて背伸びをして手を伸ばしていたものだから、ちょっと転びそうになる。
　ふわりとジンジャーに抱き留められる。
　よい匂いがした。
　穏やかに漂う香水の匂い。
「ありがと」
「いいえ、どういたしまして」
　微笑むジンジャーの――
　表情に、何か、一瞬だけ陰が指す。
　リリィは気付かない。
「えっと、これ。気になるの。これすごい、すごい可愛いな」
「そ、そうかしら」
　幾つもの金色のコインを重ねて連ねたような、それだけで出来たドレスのようなもの。実のところそれを着るとびっくりするほどに高い露出をすることになってしまうのだけど、リリィは気付かずに、両手で掲げて、明かりを照り返して輝くコインの群れよりもっともっと目をきらきらさせながら、明るい顔で。
「ほら、すっごい可愛い！」
「そうね」
「ね。ね、ジンジャー、これ、着るとどういう風になるの？」
「え――」
　わずかに躊躇いがあったものの。
　可愛い可愛いとはしゃぐリリィを目にして、ジンジャーは静かに、上品に、穏やかに溜息をひとつ。
　それはね、と語り始める――

◆　◆　◆

　それは……。
　それはね……。
　あまり思い出したくないのだけど、そうね……。
　確かに、ええ、可愛い、かしら、ね。
　うん。可愛いと言えば、可愛い。わ。ね。
　そんな風に“あのひと”も言っていたし、あなたもそんな風に言っているなら、可愛いということもあるのかも知れないわね。
　何年前だったかしら。
　ごめんなさいね。ちゃんと憶えていなくて。
　でも、わかるわ。
　この町がこうなってしまうよりも前ね。
　あのひとが、うちの劇場の出資者のひとりになって、あれこれと色々口を出すようになってすぐのことだったはず。
　もちろん、あのひとだって道理っていうものは弁えている紳士だとは思うのよ。ええ。あのひと、ちゃらんぽらんなようでいて、きちんと押さえるところは押さえられる頭のよいひとで。
　だから、口を出すと言っても、大概はまともなことで。
　演目や歌の中身をどうこう言うことはなかったの。



どちらかというと、劇場の運営やレコードの販売に、まっとうな意見を言ってくるぐらいで。ええ。パトロンやスポンサーっていうのはね、大概、変なことを言ってくるものなの。でも、あのひとはそういう有象無象の人々とは違って、きちんとしていたわ。

ええ。そう。

あたしの大好きなひとだからね。

すごいひとなのよ。

でも……。

でも、ね……。

ある時、珍しく、衣装なんて持ってきて。

「これはお前に似合う。いや、お前にしか似合わない」

ですって。

あたし、驚いてしまって。だって、そんなことを言ってきたのは初めてだったし、聞けば欧州の有名な服のデザイナーさんに頼んで、わざわざ誂えたんですって。ええ、わたしにも劇場の皆にも黙ってね。ああ、それ、演劇の衣装だったのかしら。もしかしたら、新曲のレコード・パッケージ用の衣装だったかしら。ごめんなさい、よく憶えていなくて。

そういう踏み入ったことをするひとではなかったから、あたしもみんなも驚いてしまったわ。でも、彼がそう言うからには、きっと、それはそれは素晴らしいものなのでしょうねって、みんな思ったわ。あたしも当然ね。

そうしたら……。

この……。

半裸で……コインの……ドレス……。

あの時、あたし、どんな顔で「ありがとう」と言ったかよく憶えてないわ……ええ、嬉しいの、は嬉しかったのよ。

でも……。

なにこれ、って、思っ……て……。

ん……。

あれ……。

そういえば、あのひと、って、誰だったかしら……。

ええと……サム……で、よかったのかしら……？

◆　◆　◆

話の終わりには言葉が濁ってしまったものの。

ジンジャーの表情がほんの僅かに、わかるかわからないか程度に翳ったことに、リリィは気付いたかどうか。

ただ、素敵な想い出があるものなのねと頷いて。

ただ、目、輝かせて——

「うん。やっぱり、すっごく素敵！」

（つづく）

Liar & rail FanDisk Hotch Potch

●第1回FC会議杯バルバロッサ大会!?

・2011年12月某日 某所

やんばる、睦月、桜井、犬太郎、井上、そして加納。そこに集まった者達の表情は一様に明るかった。これから始まろうとしている"バルバロッサ"というボードゲームに期待を高めているのだ。

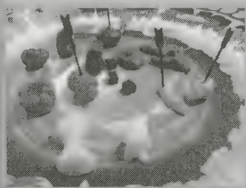
やんばる「簡単に説明すると、各人が粘土細工を2つ作り、それが何かを当てるゲームです」

桜井「ふむふむ」

やんばる「作られるものは、一般名詞でないといけません。固有名詞……ガンダム、とかはダメ」

犬太郎「あー、意外と難しいですね」

ボードゲームに精通しているやんばる氏の分かりやすいルール説明へと、参加する面々は真剣に耳を傾けていた（※注：なぜ言いだしっぺの加納がルール説明をしていないかと言うと、実は加納はバルバロッサで遊んだことがないからである）。



↑このように粘土を使ったボードゲームなのだ！

やんばる「順番にサイコロを振り止ったマスの指示に従います。質問マスに止まれば他の人に質問ができ、解答マスに止まれば解答ができます」

井上「マスに止まれなかったらダメですか？」

やんばる「黒い石というのが最初に配られて、これを使うといつでも割込めますよ～」

睦月「なるほど」

やんばる「それじゃ、やってみようか」

説明を一通り終えたところで、早速皆が粘土をこね始めた。モノ作りが本職の人間達だけに実際に作り始めるとテンションが上がっていく。

犬太郎「どんなものを作るか悩むね」

桜井「そんな分かりやすいモノのはずがない、というブラフもありますよね」

井上「質問しないと分からないってものを作らないといけないわけですしね……」

桜井「ああ、わたしが作りたいものが、わたしのスキルでは作れない……！」

やんばる「そういうことってあるよね～」

わきあいあいとゲームは始まる。

……だがしかし、この時はまさか、あのように悲劇的な結末を迎えるとは、誰一人として想像していなかったことだろう……。

井上「終わったー♪　あと1分ですよ～」

やんばる「なんだとぅ」

犬太郎「しまった……これで終わり終わりっ！」

どこまでも凝ろうとする人間の集まりなので、制限時間は5分と決められていた。迫り来る〆切に慌てつつも、次々と粘土達を完成させていく。

桜井「それじゃあサイコロふるよ～。え～い！」

犬太郎「ああっ！？　井上さんの粘土に！！」

やんばる「それで変形しちゃったら（笑」

井上「そんなヤワには作っちゃいませんよ！」

まさに波乱の幕開けと言えよう。

桜井さんは質問をするが思うような答えが得られず。次のたたらさんも質問を選ぶが同じ結果。

やんばる「訊ね方に皆個性があって面白いね」

犬太郎「質問の手立ても重要だなー」

やんばる「でも、皆ふわっとしすぎだよ～」

情報を仕入れ始めたばかりなのだから、スローペースなのは仕方がない。そんな中、最初に行いたのは桜井さんだった。

桜井「割り込みますっ！」

宣言と同時に黒い石を盤面へと放り投げる！自分の手番でなくても行動ができる、割込みだ！

桜井「加納くんのこれ！　アンサー！」

質問もそこそこにいきなり解答する力強さに、加納は驚きを隠せなかった。

桜井「……これで！」

加納「はずれ！」

しかし、ダメ！　続く加納の手番、質問の後、何か閃いたか黒い石を使って睦月にアンサー！

加納「では、たたらさんのこいつが……」

睦月「……うん、正解」

加納「よし、5点貰います！」

幸先よくスタートしたように見える加納であった。……が、調子がよいのはここまでであった。

正確な情報を求めて慎重な展開が続く。それだけ真剣になっていた。次に動いたのは犬太郎さん。

犬太郎「やんばるさんに解答！　――これで！」

やんばる「正解！　犬太郎さんも5点ね」



↑やんばるさんの作品『マンガ肉』

犬太郎「わ～い！　やった～！」

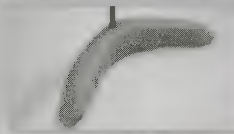
やんばる「こっちはマイナス2点だよ～」

このゲーム、実は答えたタイミングによって点数は変わる。最初のうちに当てると5点もらえ、その当てられた粘土を作ったものは減点される。しかし中盤になると当てた点数は下がり、当てられても得点になったりするのだ。

加納・犬太郎と二人が高い点を得たこともあってか、勝負師桜井さんが再び動く！

桜井「インタラプト！　たたらさんのこれ！」

睦月「正解……ぎゃー、これでマイナス4点！」



↑たたらさんの作品『ブーメラン』

当てられた粘土には写真のように矢が刺さっていく。点を得られるものは2本目を刺した人までで、3本目以降は得点にはならないのでスピードも重要だったりする。

睦月「簡単すぎたかなぁ……。次は俺か。えーと、質問をするにはサイコロで6を出さないとダメか……とりゃ！　（ころころ）……おっ」

井上「すごい！　6！！」

気合で6分の1を出したたたらさんは、マイナス効果のあるマスを飛ばして質問マスに！

睦月「わーい。質問質問～」

加納「……次、自分なんですけど。5出しそう」

たたらさんと同じマスにいた加納も同じマスに行きたかったが、どうにも6を出せる気がしない。ちなみに5マス目は『ドラゴン』という、他の人が2点を得てしまうというマイナスのマス！

加納「ここで5を出しちゃうんだ自分は……――（コロコロ）―― ウワァァァ～！？」

加納が振ったサイコロの目は見事に5！

井上「本当に出すなんて（笑」

睦月「宣言通り（笑）　皆、2点ね～♪」

やんばる「次の俺は……3だから妖精マス」

加納「何で他の皆はそんな都合の良い目が！？」

妖精マスとは、粘土を作った人に対しそれの答えの『文字』を質問できる強いマス。何文字目と指定するとその文字を答えなければならないのだ。

やんばる「加納くん、3文字目教えて」

加納「……はい、これ」

やんばる「……えええ！？　パードゥン！？……俺が想像していたものと全く違ったよ」

睦月「でも、文字訊けるのは強いよね」

犬太郎「俄然、後の質問が生きますもんね」

やんばる「う～ん……でも、割り込んで解答」

加納の作った粘土のトリッキーさに頭を悩ませつつ、出した答えは――正解！

井上「わ～！　よくあてましたね～」

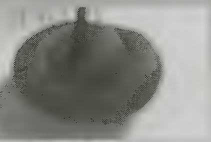
やんばる「いや、わかんないよそれ～（苦笑」

加納「とても簡単で分かりやすいと思――」

桜井「簡単でも分かりやすくもない！！」

やんばる「よし、井上さんのこれを当てよう」

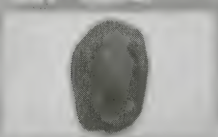
井上「正解です！」



↑井上さんの作品『バラ』

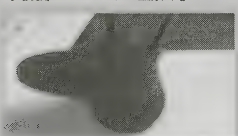
やんばる「でも勝つためには、井上さんの矢が刺さってない粘土は放っておいてほしいな〜」
井上「そんなこと言わないでくださいよ〜。どうして誰も私に質問してくれないんですか〜！」
睦月「検討がつけばするんだけどね、つかない」
希「（ひょいっ）これはすぐに当てられたら負けってことなんですかね？」
井上「それで前衛的にしたら物凄く不評です！」
睦月「前衛的じゃマズイよ〜」
　何故マズイのかというと、最後まで矢が刺さらない、答えてもらえなかった粘土を作った人は、最後にペナルティがあるからだ。かといって当てられすぎても減点になってしまう。そこがバルバロッサの面白さ。当てられまいと曖昧すぎるものや珍妙なものを作ってしまうと、今度は視野に入れてもらえなくなったりする。……しかし精巧に作ったところで、難しすぎても当ててもらえず、加納はずっとドベだったりする（涙）。

やんばる「じゃあ、たたらんの……」
睦月「どちらともいえない。そういうこともあるし、そうでないこともあるでしょう（笑）」
やんばる「えええ〜、じゃあもう桜井の当てる」
桜井「——正解っ！」



↑桜井さんの作品『笑顔』

　ただ、分かりやすそうなものへと目星をつけていても、思っていたのと違うと迷宮に入り込んでしまう。そのため、解答者も徐々に質問する対象を広げることになっていく。この段階で上位にいるのは熟達者やんばるさんとゲーマー井上さん。井上さんはここで最後のスパートをかける！
井上「では、私は犬太郎さんのこれを！」
犬太郎「ＹＥＳ！　正解！」



↑犬太郎さんの作品『ハンマー』

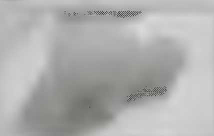
加納「わ〜、よく当てましたね〜」
井上「ほとんど文字を聞き出しちゃいました〜」

　コストはかかるが、妖精パワーを使って文字を聞き出してしまうのも勝つための手段。トップに食らいつこうと、他の面々もその業に手を出す。
犬太郎「井上さんのこれの２文字目を！」
睦月「加納くんこれの３文字目！」
加納「井上さんこれの３文字目！」
桜井「力業だ！」
やんばる「俺もう黒い石がないんだよね〜」
　黒い石を最初に使ってしまった人々は、残念だがこのラストスパートに加わることはできない。しかし先行逃げ切りもまた、戦略なのである。
加納「……あれ？　文字読み間違えてる？　もしこれがそうなら……、犬太郎さんのこれ……」
犬太郎「正解〜！」
やんばる「これでゲームが終了だね〜」
　最後は泥塗れとなった戦いだったが、こうして勝負は無事に終了——しなかった。
加納「ずるいよ犬太郎さん！　だまされた〜！」
犬太郎「ええ〜？　何かやっちゃったっけ？」
加納「ヒントによってひらがなとカタカナ混ぜるのナシですよ〜（泣笑）」
犬太郎「あー、ごめん！　気にしてなかった！」
やんばる「それは混乱するかもねー」
桜井「でもさー。加納くんのこいつは何なの？」



↑加納による問題作。ひとつめ。

加納「これは時計ですけど……」
やんばる「砂時計だから……だよね？」
犬太郎「ギリギリだなぁー」
やんばる「それはいいけど、問題はこっち！」



↑加納による問題作。ふたつめ。

やんばる「かめでも、すっぽんでもないんだよね？　じゃあ、一体何なの？」
加納「こいつですか？　こいつは、相撲です」
一同「「「「す、すもうーッ！？」」」」
加納「え、いやぁ、ほら。河童ってことで……。河童は相撲とりますし……ね？」
桜井「分からない！　これは分からないよ！」
井上「これはナシですよ！」
犬太郎「せめて２体作ろうよ！」
睦月「君は捻りすぎなんだよ！　もっと素直になろうよ！　大体、隙あらばキャラに虫を食べさせようとするし……！」
やんばる「君は犬太郎さんを責められないよ！」

加納「そ、そんなぁ〜……（嘆）」

ハト「このように誰かのせいで、このトトカルチョは酷い締めくくりとなってしまいましたとさ」
ナチュ「そ、そう言わず……気を取り直して、優勝者は誰だクイズの正解者発表をしましょう！」
ナチュ「優勝者は——やんばるさんでした！」
オオカミ「安定した力強さは流石といえよう」
ハト「正解者は３名！　あかべこ、かいなむつき、そしてカナエー号ですよ！　おめでとう！」
ハト「『上手すぎてもダメなゲームなので…』と、やんばるさんを選んだあかべこ、分かってるぅ」
ナチュ「前回は残念でしたが今回は正解でしたね、かいなむつきさん！　おめでとうございます！」
オオカミ「カナエー号は『優しすぎず難しすぎずないい塩梅でお題を作りそうかなと思いました』と今回の展開を言い当てていた。見事」
ナチュ「粘土の腕前に期待して犬太郎さんを選んだ方もいらっしゃいましたが、上手ければ勝てるゲームではなかったのですよね」
オオカミ「システムに強そうということで睦月たたらを選んだ者もいたが、作られた粘土が素直すぎたせいで減点が響いてしまった」
ハト「その中でグランテールは流石でしたね。さすがは指先の魔術師……！（ガクガク）」
オオカミ「バルバロッサは面白いゲームなので、もし機会があればこれを読んでくれている皆にも、是非遊んでもらいたいと思う」
ハト「はい！　そんなこんなで、発売から約１年と続きましたハチポチコーナーですが、前号で予告していた通り今回で最終回です！」
ナチュ「最終回……。これで皆さんと本当にお別れだと思うと、なんだか、寂しいですね……」
オオカミ「ナチュ、別れは悲しむべきものではない。笑顔であるべきだ」
ナチュ「あ……、は、はい！」
ハト「そうです！　湿っぽいのは我々には似合わないというもの！　バルバロッサ大会がｇｄｇｄで終わった分、あたし達はしっかり〆るです！」
ナチュ「読んで下さった皆様、投稿して下さった皆様、ありがとうございましたっ！」
ハト「あたし達はこれで卒業となるです！」
オオカミ「しばらくは寒い日が続くと思うが、読者の皆は風邪などひかないようにな！」
ナチュ「それでは皆様……」
一同「またいつか、この広い世界のどこかで！」

〜終わり〜

ハト「あ、言い忘れてたです。次回はないですが、参加者から『誰が一番ヒドかったか？』を読者の皆様に聞きたいという意見が！　そこで、よければ次回の投稿時に教えてくれると嬉しいですよ！
　そんな感じでヨロシクゥ！！[彡サッ]」

〜今度こそ本当におしまい〜

花魁春秋

「よっ！」「はっ！」
威勢のいいかけ声に合いの手が入り、臼の中で湯気をあげる餅に杵が打ちつけられる鈍い音が響く。
晴れ渡った冬の昼間、高瀬屋の中庭でも、年末の風物詩といえる餅つきの光景が繰り広げられていた。
「父御どの、腰が入ってないよ。もうお疲れかい？」
「うるせぇ！」
遊女も用人も、店の皆が総出でこの中庭に集まり、新年を迎えるための大事な行事のひとつに参加していた。
主人の嘉門が杵を振り上げるたびに、かけ声があがる。杵が振り下ろされて餅をつき、また杵が上がれば、鉄佐が阿吽の呼吸で餅をこねる。男衆がそれを取り囲み、威勢のいい声を上げつつも、嘉門の杵の扱いように笑いながら野次を飛ばしていた。
縁側では天音や氷笹のような太夫の格を持つ遊女から、珠琴のような端の遊女、禿までが勢揃いしてつき上がった餅を小分けにして丸めていく。お増がそれを差配しているうちに、また蒸し上がった餅米が台所から運ばれてくる……。
「ねぇねぇ、あたし、次はきな粉で食べたい！」
「珠ちゃん、あまりつまみ食いばかりしていたら、お増姐さんに叱られるわよ」
「だってぇ、つきたてのお餅っておいしいんだもん！　ほら、天音姐さんもどう？」
「……そうね、ちょっとだけ、もらっちゃおうかな」
「珠、あんまりつまみ食いばかりしていると、夕飯を減らすよ？」
「ひっ！」
「あ、お、お増姐さん、ごめんなさい、そのちょっとだけですから」
「あんたは別にいいけどね。珠は食べ過ぎだろう。それじゃ、減らさなくても夕飯は入らないんじゃないかい？……珠？」
「んぐ、ん……、んん……」
「た、珠ちゃん！？」
「んぐ、ん、んぐ……、んはぁ！　し、死ぬかと思った……」
「ほら、意地汚く頬張るからだよ」
珠琴がなんとかつかえていた餅を飲み込んで、傍らの湯飲みを手に取った時、固唾をのんでそれを見守っていた全員から、笑い声があがった。

※　※　※

餅、特につき餅は、日本人にとって、正月などのハレの日の膳には欠かすことのできない食材でした。
吉原でも、年の瀬にはこうして餅をつき、新年に備えていました。仕出し屋などから買うこともちろんできましたが、こうして自分達でついた餅を神棚にあげて新年を迎え、その最初の食事に供することも多かったようです。もちろん、年明け早々に店に上がる上客にも振る舞われ、それも客にとっては楽しみであったと思われます。

文交わし
（お便りその他のコーナー）

天音「今回もたくさんのお便り、ありがとうございます。」
珠琴「今回はめいびいさんの素敵なイラストもついたよ！　……天音姐さんだけど」
氷笹「さて、今回はちょいと紙幅も余裕がないんでね、お便りを紹介させてもらおうかねぇ」
天音「はい、まずはかいなむつきさんのお便りです。『花魁という厳しい世界の話であるにもかかわらず、高瀬屋の人たちはほんとに気持ちの良い良い人ばかりでプレイしてて和みました〜。基本的に皆さん仲良しでいいですね！！』」
珠琴「ゲームの感想、ありがとう！！」
氷笹「まぁ、裏ではいくらでもどろどろとしたこと、あるんだけどねぇ、この世界」
天音「あ、あまりそういうことを言ってしまっては……。う、うちは仲良しなんですよね？」
氷笹「まぁ、父御とのやりとりで、あの通りのボンクラだからねぇ」
珠琴「次はカナエー号さんです！『江戸の話やキャラのやり取りもあって読むのが楽しかったです。パラレルではこうなっているのも捨てがたいので、そういったキャラの座談会みたいなのも是非！！』」
天音「しばらくは、季節にあわせた江戸の風物詩を絡めたものでやっていくそうですよ」
珠琴「次回もめいびいさんのイラストがつく予定だから、ぜひ、あたしを一押しにね！！」
天音「今回も一押しは氷笹姐さんがよかったんだけど……、なぜ、わたしなのかしら」
氷笹「私は前号で出てたからねぇ。まぁ、このままずっと出ないのも一興さね」
天音「そんなことはさせませんよ！　それでは皆様、今回はこのへんで」
珠琴「また次号でお会いしましょう！！」





「スチームパンクシリーズ　Fullvoice ReBORN」ご発売記念。アティとむにむにキーア。大石竜子

※このページは右からお読みください。

「ほお。名乗ったかや。してお前は、何故にここにある。見れば土地の者とも違う様子」

「わたしは、この地域の文化とか習慣とかの、その、調査に……っ。民俗学って言うンです。

わたしの、家系の、大叔母？　に当たる人が、その研究者、で、いいえ、面識は、無いです、だって曾祖母とは断絶してて、祖母はその人と二番目の旦那さんとの娘で、その研究者の大叔母、は、家系図から外れてて、でも勉強していく間に判って――」

堰が切れたように語り続ける、礼子にリンドウはやや呆れたように眉根を上げたが。

「よう囀ること。つまりは、先祖に倣っているのだね。その者の名は？」

何故リンドウが、人の営みなどに興味を示したのか、もしかしたら、自分の顔相に期するところがあったのやも知れぬ、と、礼子は後になって思う。

「あ……せ、瀬川京香、って言います。調査旅行の途中で、行方不明になってそれっきりだって」

それが、礼子の大叔母の名。二つの大戦の間の時代、当時の女性としては相当に尖鋭な生き様を辿り、かつ不可解な失踪を遂げた女流研究者の名。京香の母、つまり礼子の曾祖母は、京香をドイツの男性との間に為して後、そのドイツ人男性と別れてから改めてこの国の男性と結婚した。その血筋が現在の礼子へと連なっている。

こんな自分の身上など聞かされて、あやかしは退屈するだろう、下手すれば不興を買って、生命奪われてしまうかも知れない。そうと思いつつも語らずにはいられなかった礼子は、ある意味で覚悟を決めていた、のに。

リンドウが浮かべたのは、興がる風の顔つきの。

「その名には、覚えがあるね。

あの子が破滅させた女の一人が、確かその名だったはず。血が遺っていたとは、だから人というのは面白い」

「破滅させた？　瀬川京香を？　誰が？」

「さて――」

くつくつと、妖艶に笑んでリンドウは、礼子を腕を取り、引き寄せて。ああ、と礼子はいよいよ観念した。でもこの、不思議に甘く、心を痺れさせるような肌触り、薫りの中で逝くのならば、それもいい、とさえ。

けれど。礼子を次の瞬間包んだのは、肌を掃いていく風の涼しさ、それを飛翔感だ、と気づいた時には彼女は既に――N町××の上空に、在り。リンドウの小脇に抱えられて。一蹴りで宙に舞い上がったのだと、礼子は悟る。

「あの子に縁の名を聞いた、これはその褒美だよ、礼子とやら。もっとも縁は縁でも、お前たちには悪縁であろうが、さ」

リンドウは、また虚空を蹴って、やがて海岸沿いに降り立つと、後はもう振り返りもせず、防風林の暗がりへと消えていこうとする、その背に礼子は追いすがった。

「待って――待ってリンドウさま。

話を――もう少しだけでも……っ」

「もう話すことなど、ない。

それに私は――影だ。リンドウ、と名乗りはしたものの。本当の私は、もうこの邦、この時代にはいないのだから」

「本当の私は、あの子と共に立ち去った」

「瞼の裏に残る、面影のようなモノ。それがこの私、リンドウの影。いまだ消えずにいるのは、さてなんの未練やら、自分でもよう判らぬわ」

「お行き、礼子。けれど覚えておくがいい。

お前がどれだけ追おうとも、この邦には、我らのようなモノが住まう山や、影は、絶えて久しい。

それでも追うというのなら、お前もまた、人の世から外れてしまうことになる。

それを、覚えておくんだね――」

一陣の強風、砂を巻き上げ礼子の目を一時塞ぎ、再び開いた時にはリンドウ、その影の姿はとうになく。

ただ、礼子の足元に白狐の面だけが白々と転がっているばかり。

――傍らに立つのは誰・了――



花散峪山人考外伝

――傍らに立つのは誰――

――これはいささか、いや相当に。

――困った事になったんじゃないのかな。

杜見礼子（もりみ・れいこ）は、提灯の灯りで足元、慣れない手つきで照らしながら困惑したという。夏の夜闇は彼女がかつて経験した事のないまでに濃く、深く、提灯の灯り程度ではますますその摺る墨の色、強調されるばかりで、伏せた腕の中に閉じこめられた心地になったくらい。

（確かに東京みたいな大都会って訳じゃないけど、ここだってそこまで田舎ってわけじゃ……）

（それに道に迷うほど、酔っ払ってもいないって思うし）

実際彼女が振る舞われた酒の量は、土地の人々に言わせれば喉湿し程度だったろう。

二週間後から始まる事になる予定の、彼女が所属する、大学での民俗学研究会の調査合宿、その下調べと挨拶回りに伺候した、T県N町××の地区長宅。振る舞ってくれた酒とあれば断るわけにもいかず、勧められるままに呑んだとはいえ、慎みは忘れず程良いところで切り上げた。タクシーを遠慮して、宿までの路を徒歩で選んだ、彼女に手渡されたのが今どき提灯であったのは、懐中電灯の電池が切れていたらしいから、だけではなかろう。礼子が学ぶ民俗学という分野へ、地区長なりの洒落めかし、冗談の類だったと見える。ただ厚意は厚意、断り切れず、それで礼子は今どき屋号入りの提灯なぞぶら下げて歩いているわけだ、が――

（迷うような横道なんて無かったって思うけど）

N町××は、海沿いの小さな町ではあるけれど、今はコンビニもあればブロードバンド回線も整備され、佇まいだけを見ればほとんど東京都下の閑静な住宅街と遜色はない。

もちろん整備され、開発されつつあるとはいえ、その端々には昔ながらの家並みや、山林なども多く残っていて、一度住宅地を外れたならば田の匂い、草の匂いは強い。だが、こうまで灯火の一つも見えないほどの過疎地ではなかったのに。

闇の圧に耐えきれず、携帯を取り出そうとした、彼女の手を止めたのは、耳を押し包んだような無音の圧力の、そこで礼子は、それまで周囲に充満していた虫の音が途絶えていた事に気づき、慄然と――

―なりかかったところに、伝わってきた音がある。

虫や水田を跳ねかす夜の生き物の自然の音ではない。

それはお囃子。太鼓に笛の音、素朴な拍子と響きの。遠い、でも確かに聞こえた、礼子は囃子を聞く寸前に降りた無音の事も忘れ、その音の人めいた懐かしさ、暖かさに提灯を巡らせて源を求めれば。

彼女の左手、道の際まで迫った森の向こうから囃子の音と、そして明かりの群れの、樹木の間に間に、見える、遠いけれど闇の向こうに透けている。

「そちらへ行くつもり、かい？」

「ええ。だって。あれは夏祭りかなにかのお囃子でしょう？　わたし、道に迷ってしまったみたいで。向こうに行けば、宿までの道、誰かに訊けるかも―

――って？」

再び礼子は慄然としたという。これは、誰だ？

今自分は、誰と口を聞いた？　地区長宅には一人で赴いて、一人で辞去して、道々誰とも行き逢わなかったのに、これは一体。ざわざわとうなじにちりつくものを感じながら窺って、

「誰、あなた――誰――」

悲鳴――脇に佇んでいたのは、見上げるような長身の、白い面の、正体不明の――だから礼子は悲鳴を迸らせる――前に。

「誰って。お前を送りにきたのだよ。

ほんに男どもときたら、気の利かない。

こんな娘に、一人夜道を往かせるとか、さ。

提灯一つが何になる」

そのように、するりと述べられて、礼子の心に来した恐慌の念は雲散霧消した。白い、狐の面の裡からであったけれど声の響きからして相手は女、それも不思議に艶やかな声音で、これが礼子の懐の中を、柔美に落ち着かせたのだった。

「あ、ああ。そうだったんですか。ごめんなさい。

わたし、あなたがあんまりにも背が高くって、

それにその、お面、お化けに見えてしまって。

『八尺様』かなにかみたいな……」

「ふぅん。その、八尺某というのは。

聞き慣れぬ響きだけれど」

「お化け、です。あなたのように背の高い、女のお化け。あ、って言っても、石燕や春泉の百鬼夜行図にあるような、じゃなくって、もっと新しい、都市伝説だと思うの。よくできた……」

言葉が尻窄まりになったのは、何故こんなにも熱心に都市伝説などを語っている自分が馬鹿馬鹿しく、かつ相手に対して非礼ではないかと思い至ったからで。確かに相手は、二メートルを越えようかという長身ではあったけれど、背が高いそれだけで妖怪扱いされてはたまったものでは無かろう、と。

「ふぅん。近頃では奇妙なあやかしを語るものだこと。なんにしてもお前、あの囃子、明かりに気を取られてはいけないね」

「けれど、遠いけれどはっきり見えるし聞こえるし……」

「その、遠いのに、こんなにくらいのに、それだけ浮かび上がっているというのは、可笑しくは思わないのかえ？」

「え……え……？」

「土地者なら誰でも知っている……否、今日時分では忘れてしまっているか知らん。この辺りでは、夜道、綾目も判らぬ闇に呑まれたなら、見える灯りにはついていかぬ、それが習いだった」

肌を妖しく愛撫するような声音で、白狐の面の相手が礼子に説いてみせたのが、古めかしい口碑。

「近づいても、辿り着けはしないのだよ、どこまでいっても。ばかりか、一晩迷う事もある。時によっては、穴にはまって腰を挫いた、そんな話さえある」

「よく、ご存じなんですね」

「まあ、の。私も、あやかしなんじゃもの」

「え――あな、た――？」

「こういうモノだと、言っているのさ」

言うなりそれは、礼子が警戒心なく話していた相手は、白狐の面を外して、現した貌こそが。

異妖、であった。

造作自体はまぎれもなく、優れて秀でて美しい。しかしその双眸は覗きこめば失墜感を覚えるほどに果てしない歳月と心性を秘めており、こんな目をした人間など有り得ないと礼子に断言させる。それにその髪だ、赤茶色の、蜘蛛の糸のように繊細な長髪は、風もないのに自らざわめき、先端は得体の知れない葛の葉と化していて。そしてその肢体だ。猩々緋の振袖を肩脱ぎにし、長襦袢に包まれた乳房は豊麗なれど、手足の骨格、長さの釣合があからさまに人間と異なる。

これは――これは、なんだ？

自分はこんなのと口を聞いていたのか？

礼子の胸中に去来していたのは、恐怖を越えて、いっそ畏れに近い感情であり、ひれ伏したい、そしてこの女妖の裁きを待ちたいとこいねがう心さえあった。

「あなたは……あなたは……っ」

「名乗りおくれたね。私はリンドウ。至るところのリンドウさ。さしずめ今は、この××のリンドウと言うところか。して、お前の名は」

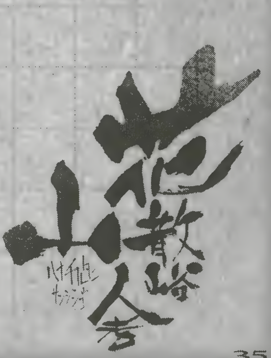
「わ、わ、たし、は……っ」

「私のような化け物に、名を明かすのだよ。それでもお前は名乗るかい」

妖物に名を名乗る事、その意味は、古の風俗を学ぶ礼子には薄ぼんやりと感じ取れる。それは相手に己の全存在を預けてしまう事に他ならず、それでもなお名乗ってしまったのは、やはり礼子がそういった心性とは遠ざかった現代人であった事にも起因していたけれど、それよりもリンドウへの畏怖と、それを上回る想いが喉を突きあげていたから。それはたぶん――喜び。

こうして、真に妖なるモノと対峙できているこの瞬間への。恐らくは、彼女の体に流れる血、故の。

「わたし、は、杜見礼子と言います……っ」



おたよりのコーナー LETTERS & POINTS

今回は超狭い（投稿コーナーは２～５ｐの範囲で全体の調整役も担っています）のでちゃっちゃと参りましょう～。

○行殺新選組ふれっしゅ

『おまちちゃんはどうやって生計を立てているんですか？巫女らしくないので貧乏そうに見えるのですが…』　（1446ふ～ちゃん）1+2p

「フリーターでいろんなバイトをかけもちしたりしてます」　【たたら】

○蒼天のセレナリアReBORN

『フルボイスリメイクおめでとうございます！個人的に、ソム＝メソムとニェルレイのカップルがとても好きなので、フルボイスで二人のイチャイチャが聞けるなんて…！（想像もしておりませんでした）万歳！　今から楽しみです。わくわく！』（2870乙夜）1+3p

「ソム＝メソムさんのお声、ニェルレイと一緒のシーンでとても映えていて感無量なのです…ありがとうございます！」　【桜井】

『お話のリクエストになってしまいますが、コニーとシェラがまだセレナリアに向かう前のお話が見てみたいです。コニーとシェラの出会いとかもいつか語られるのでしょうか』
（3192トリスメギストス）1+3p

「リクエストありがとうございます！　大変申し訳ありません、今回でいったんセレナリアのコーナーは終了してしまうのですが、何かの機会に描きたい題材です。出会いのお話も実はあるのです、あるので、どこかで…（やんばるさんを見る）」　【桜井】

○赫炎のインガノックReBORN

『インガノックコーナーが最終回を迎えてしまって本当に悲しい…。クラック・クロームの孤独な戦いとウーナの強く憂いのある美しさ。大石さんの挿絵も素晴らしくどっぷりと浸ってしまいました。そしてフルボイス版インガノック、心の底から楽しみです！』（2595サハラ）1+3p

「ガールンの黄金、お楽しみいただけたなら何よりです。応援いただきありがとうございました。フルボイスReBORNもどうか、お楽しみいただけますようにっ」　【桜井】

『デュークは殉職して二階級昇進しているようです、ウーナさんの中では。だから、イラスト左端の男性が人間の頃のデュークだと思い「デュークさんかっけ──！！」と、早とちりしたのは自分だけではないはず』
（2585セトの教授）1+3p

「それは、クロック・クラック・クロ──こほん、謎の誰かですね…！」【桜井】

『インガノックノベル終了…お疲れ様でした!!　路地裏の騎士様やウーナさん、デュークさんや背後の彼女にもういなくなってしまったあの子、色んなひとたちに出逢えて良かったです。というかデュークさん亡くなられたんですか…かなしい…。本人が知っていたかどうかはわかりませんが、ウーナさんに気に入って頂けていたようで良かったなあと何故か私が安心しました。雨の中佇むウーナさんがお美しい…そして切ない…。まだインガアペンドをプレイしていないのですが、噂によるとウーナさんが出演していらっしゃるらしいので楽しみです。本編とは少し違うインガノックの世界を楽しませて頂き本当にありがとうございました！』　（2603かいむなつき）1+3p

「ありがとうございます。お楽しみいただけて、嬉しいです…。ウーナのその後についてはハチポチ付属のインガノック・アペンドシナリオで描かれています。どうか、そちらも併せてお楽しみいただければ幸いです」　【桜井】

○霞外籠逗留記

『今までお疲れ様でした。毎度毎度楽しませていただきました。次号はまだ紅殻町とのコラボ企画が続くようなのでそちらを楽しみにしてます。以降もどこかの世界に紛れ込んでくれるのを期待してます（笑）』　（3640悠季）1+3p

「ご声援有難うございました！　渡し守の話も是非どこかで書き下ろしたい所存です。そして、では例えば山人考の世界に霞外籠キャラの、司書あたりがまぎれこんだ場合……それはきっと、東宝怪獣大決戦的なスペクタクルになる……ような……」　【希】

○漆黒のシャルノスReBORN

『モテようと頑張るメアリさんも、それをやんわり阻止しちゃうシャーリーもイイなあ！
　それを見てるアーシェもひっくるめて、この関係がたまらなくニヤニヤです。そして、ドナさん麗しい！』　（3084ニコ）1+3p

「わたしも三人の距離感というか間合いというか、大好きです。AKIRAさんの描かれるこの間合い、いいな～♪」　【桜井】

「ありがとうございます！　メアリさん、本当に（ちゃんと）モテるといいんですけどもねー…」　【ＡＫＩＲＡ】

『うん！！　やっぱりメアリさんモテますよね！！　あんな美人で一見ツンの雰囲気が漂う可憐な仔猫ちゃんを殿方が放っておくはずがないんだ…。しかしそれすらノロケの材料に使ってしまうシャーリィさんであった。私、シャーリィはメアリの事を自分の半身か何かだと思ってるんじゃ…と推察してんですが、こう我が事のようにドヤ顔で自慢されるとあながち間違ってないんじゃないかなあとも思います（笑）　黙ってお話を聞いてあげてるアーシェは空気の読める良い子！』　（2603かいむなつき）1+3p

「モテていそうでいて、でも本編で男子にモテてる描写がないメアリさん、ハインツ先輩との会話でもあれですもんね…」【ＡＫＩＲＡ】

「シャーリィは確かに我がことのように考えていそうですね。でも自分自身の相手の殿方にはそんなに高いハードルを設けない子にも思いつつ…あ、それはメアリも一緒かな…ただ、無意識に防御フィールドが…」【桜井】

○紅殻町博物誌

『少し前になりますが、白子と一緒に映画を観ようと鈴木清順三部作を視聴しました。「ツィゴイネルワイゼン」のいきなりの蟹に唖然・・・。若くしていい趣味をなさっている白子さんの将来が心配です。また、視聴後一月を空けずに原田芳雄氏が亡くなってしまわれる辺り、どんだけネタを作ってくれるのかと。』　（2380もりぎ呉服店）1+3p

「まずは原田芳雄氏に黙祷を。また１人名優が逝ってしまいました……。さて仰有る通り佳い趣味をしている白子さんですが、「白子は清順大正三部作の後、寺山修司の『草迷宮』にあの光洋座にリクエストする」と言うメモが見つかりましたが、さて。ある意味清順のエッセンスを更に煮出したような映像です」　【希】

『うわわーーー！！　洋服に着替えた法師ちゃん可愛いです！！　なまあし…なまあし…！ふともも…！　和やかに笑ってるエミリアさんも新鮮でとても素敵です！！　いいものが見られました…（正座）。紅殻町はいい街だと思うのですが法師ちゃんにとってはやはりあの宿が一番居心地がいいものなのですね。アイスクリームソーダを食してびっくりしていたのが可愛くって思わず眼に浮かぶようでした』　（2603かいむなつき）1+3p

「霞外籠の外伝を合わせてみると、琵琶法師は革ジャンにデニムという洋装は既にしているのですが、ここで初めてスカートを履いた事になります。たぶん彼女としては、襦袢一枚になるより心細かったんじゃないでしょうか。それを考えるとエミリアはにっこり羞恥プレイを強いていた事に……いやいやいや」　【希】

○白光のヴァルーシア

『お、終わってしまった…！（涙）　まだまだその後が気になるヴァルーシアの人々です。うぅ…また何処かでお会いしたいです。最終回の大石さんの挿絵がすごく美しくて…！やはり少年と少女の物語は眩しいくらい輝いています。すべての人によき青空を！』
（2595サハラ）1+3p

「大石さんの挿絵、本当に、もう、もう、美しくて…。ありがとうございます、どこかの空できっと再会できますように。わたしもまだまだ書きたいことがありますっ（やんばるさんを見る）」　【桜井】

『アナとカシムのその後が読めてよかったです！　その後の二人がどうなったのか気になっていたので。ＦＣに入っててよかったなあ、としみじみ思いました。また、アスルとクセルの成長した姿も見れて感激でした。大石さんの挿絵も美麗で！　残念ながら最終回ですが、二人の冒険はまだまだ続くんですね。これからも様々な地を巡るのだろうと思うと胸が熱くなります。そして、アルディーンさんのその後がぜひぜひ読みたいですっ！　わー気になります！！』　（3084ニコ）1+3p
「大石さんの挿絵、いいですよね…！　これからの彼らの日々や冒険はどこかでまた語る機会もあるかもしれません。アルディーンも！　オスマン機関帝国については色々考えるところがあるので、ええ、ぜひ…」　【桜井】

『うおおおおアナ姉とカシムktkr！　と思ったら最終回ですか…！　お疲れ様ですと共に終了ということは応援が足りなかったと壁に頭を打ち付ける次第です。キラキラ眩しい主人公カップルはセレナリアのコーナーの回想などで出番があったら嬉しいです、ハイ。……ヴァルーシアで驚くほどコニーへの愛情だだ漏れだったカルベルティですが、ウルメンシュ内での２人がアスルとクセルの目にどう映っていたのか気になります』　（3565草明）1+3p
「ご声援や投稿は沢山いただいていたのです…！　ですが、すみません、諸事情により最終回を迎えさせて頂きました。ウルメンシュでのアスル＆クセルは、どこかでまた描けたらいいなと考えています！　はい！」　【桜井】

○どすこい！女雪相撲

『孫揃いましたね！　新しく描かれたイラストがそれぞれの特徴のイメージぴったりでした。眼鏡キャラが好きなのでついそっちに目がいってしまいましたが、蝶子のほんわかな雰囲気にもやられました。柔らかな感じがより作品内で際立って見えて、癒しな感じがします〜。髪型もふんわり可愛い。あとイラストの線と塗りが柔らかくて、女の子の可愛さがより伝わってきました！　揃ったところをカラーで見たいー』　（0674カナエー号）1+3p
「ありがとうございます！孫達楽しんでデザインさせていただきました。イラスト、色々試行錯誤しているのですがそう言っていただけると嬉しいです。岩清水さんが書かれる雪相撲キャラ達の可愛さをもっとお伝えできればと思いますっ」　【霧生実奈】

『私もカラーで見たいです。ついでに他のキャラ達の子孫がどうなっているのかも気になっています』　【岩清水】

○信天翁航海録

『わずかな休憩の一時が見ていて和みます〜。撫でたくなるような無防備なクロ達と、機関長の表情がそれぞれ何とも言えずツボです。コメントで書かれてあった、床でぐんにゃりしているところが楽に想像出来ました。どんな夢を見ているのかちょっと気になります』　（0674カナエー号）1+3p
「まあある意味、機関長を前にして無防備で眠っていられるくらいには、クロも神経が案外神経が太いのかも知れません。気の弱い下級水夫君あたりは、同じ状況ならたぶん悪夢に魘されているはずで、それくらいあの機関長は隠然と恐れられています」　【希】

○紫影のソナーニル

『ウェイクアップコーヒーをテーマに、アランとルチアーノがそれぞれの想い人を交えて男の約束を取り交わす場面は、互いに姿が変わっても約束を果たしている本編を思うと、彼らの義理堅さが伺えます。片や、リリィ＆グレムリンコンビは微笑ましい限り。ふたりして、にがいにがい言っているから、おこさま感がより増しているかと（ＧＪ、グレムリン）。これが元で、リリィがコーヒー嫌いにならなければいいのですが（もしそうなら、Ａのリベンジに期待）』　（2585セトの教授）1+3p
AKIRA「たぶんリリィ、コーヒー苦手になっちゃってますね。一番最初の印象で美味しくないと、そうなっちゃいますよね。だから次にコーヒーを見ても『もういい…』と…」桜井「ああ…なっちゃいますね…」AKIRA「最初がきついと、美味しかったっていう人と話合わなくなっちゃうんですよね」桜井「つ、次はカフェオレでリベンジだ！」

『手回し豆挽きというとついホッツェンプロッツを思い出してしまいます。コーヒーの匂いが好きだけど飲めない、というのは正に幼い頃の自分でリリィに感情移入しました。……しかし、エリシアとアランの電信はどんな会話をしていたんでしょう……？　エリシアは時間帯的に寝室で話している場合が多そうですよね。横で漏れ聞こえていたであろうヴィヴィは、甘さに悶えていたのかそれとも焦れったさに悶えていたのか。……後者のような気が致しますが（笑）』　（3565草明）1+3p
「多分、両方ですよね。ヴィヴィ。横にいる時には気を遣うと思うんですけど、天然系の会話はやっぱり…アランさんのほうの声が聞こえないから、とんちんかんスィートという謎の会話に」　【ＡＫＩＲＡ】
「ああ…そうなりますね…。とても不思議な受け答えに聞こえることでしょう…」　【桜井】

『アランさんとルチアーノの邂逅…！　作中ではアランさんはエリシアを通して描かれるところが大きかったのでもっとNY時代の彼のお話が読みたいです。そしてリリィはいつものごとく愛らしい。グレムリン…もしかしたらこいつ影のマスコットなんじゃ…かわいすぎる…』　（3631ゆき）1+3p
「あっ。グ、グレムリン、実はマスコット的位置付けではあるのです。そうでした。実はそうなのです。そういえば本編や作品紹介ページでもそう書いていませんでしたが、そ、そうなのです」　【桜井】
「本編はリリィさんがマスコットになっちゃった的な…おお…」　【ＡＫＩＲＡ】

○花散峪山人考

『主役の風体が探偵の金田一某にそっくりだったので「これは困ったら頭をガリガリ掻くに違いない！」とか思ってたら、まったく違う話でなおかつ恐ろしかったです；　でも期待してます』　（2352みぐら）1+3p
「ちなみに映像において、金田一某のスタイルがあの書生風に落ち着くまでは幾つか試行錯誤があったようで、初期の頃は背広姿にソフト帽、というそれ明智じゃない？　という衣装もあったとか。ちょっと想像しがたいですねよね……」　【希】

『毎度、レイルソフトの紙の体験版はいいですね！　他の文庫本と本棚に並べてニマニマしてます（やんばるさんがついったーでちらりと言っていた、霞外籠逗留記の紙の体験版もあったらいいなあ……）。ゲームの体験版もプレイしました、楽しかったです！　復讐の末に、結末は、彼らの行く末が気になります！　いちは何故に婚約者に瓜ふたつなのか、そして、暴虐三昧な伊波の過去、初美さんとの甘々なとこを見たい！　発売が楽しみです！』　（2352みぐら）1+3p
「伊波と初美の過去は、こちらも書いていて色々と落差に身悶えしましたとも。伊波と初美とそして椿を交えた過去は、戦前の風俗も絡めて色々と書いてみたいところであります」　【希】

『ページを開いた時のインパクトがスゴかったです。これは女の子より主人公がどう描かれるか楽しみな作品ですね』　（3192トリスメギストス）1+3p
「伊波の人物描写はなんというか、もうアクセルベタ踏みで描き上げました。結果レイルソフト全キャラ含めて随一のピカレスクマンになったかと。お楽しみいただけたらさいわいなのですが」　【希】

○その他のコーナー・投稿募集

うわあ、もう全くスペースがない……！　えと、今回は同人誌も２冊お送りいただいたので、巻末にて紹介させていただきます〜。各コーナーのポイントと此処までの集計ポイントは会報発行時期に合わせてＷＥＢに掲載いたします。あもう終ｒ

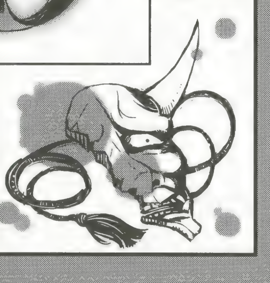

どうするどうなるくも。
そして、ついに全てのブルマが
揃ったと思ったのに、
最後の一つが破裂してしまったのよねー
ぽかーん
バックナンバーも
よろしくね！
LLE世界は未合流のため、吉野瑞穂さんはシルエット状態でお送りします。
——こうして、
ブルマの力の暴走で
いくつもの世界が
混ざってしまったのです。
この世界の
主導権を握るには、
7つのブルマの力が
必要なんだけど……
今は、
この世界を元に戻そう派と
今のままで良い派で
争ってるの。
ちなみに過去の投稿の結果、「世界を元に戻さない派」にはネコミミがつくことになりました。
よかった、
気がついた。
……あなたは？
オニイチャン、
アサヨ、オキテ。
オニイチャ
カタ カタ
って、ただの
オタク部屋
じゃないかーっ！！
お兄ちゃん、朝よ。
起きて——
——ここは？
……書庫？
おらぁ
結局スライムまん食べなかったね…
ちょ～Ｂ２Ｋ発ライアー世界行きクロスオーバー企画！
ファイナルブルマクエスト
-導かれシモノ達-
回想：——崩壊直前のシルバーブルーマ体内にて——
俺のコレクションと——
——妹を、
救ってくれ！
——『神』よ、心あらば
聞いてくれ！
こ、こうなったら、
俺はどうなってもいい！
ああっ
バラ バラ
俺の金と魂と命と人生と
血と汗と涙と色んな汁をかけた
コレクションの数々がー！
……！
お兄ちゃんの……
馬鹿——!!!
その台詞は——
現実の女性に
言われ慣れている……！
キラーン
兄が遺してくれた
物の中にこれが——
こ、これはっ!?
あなたも、
お兄さんを……
ついに服ゲット!?
祝！脱★全裸!!



次回予告＆参加要項！



A: まわし



B: はにゃんめん

皆様の投票がストーリーを作る、読者参加型コミックRPG！　７色のブルマを探す使命を受けたアイ一行。なかなか進まない事態、その一方で敵陣営は着々と目的へ向かっている。さあ、この状況を脱出するために必要なアイテムは何だ！？

毎回、漫画の最後に**２択の選択肢**を用意します。選択肢は**ライアー作品のいずれかと対応**しており、投票の多かった方のゲーム／キャラクターはゆうしゃアイの仲間として、以後行動を共にします。選ばれなかった方のゲーム／キャラクターはいずれ敵として出てくるかも！？？　良く考えて、仲間になった方が面白そうな方を選んでくださいね！

投票は**ライアーＨＰのＦＣページ内に設置した専用フォームで、会報発送から１ヶ月間**受け付けます。必要事項はフォームに記載しますので、よ～くご覧ください。フォーム以外からの投稿は受け付けないのと、〆切が他のコーナーとは異なるので、ご注意をば～。自由記入欄でお寄せいただいたネタや、次回以降の展開希望なども結構ダイレクトに反映するぜ～？　ワイルドだぜぇ～？

みんなで作るライアークロスオーバーコミック。次回もこうご期待！

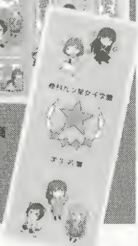
※投票してくれた全ての方に１ｐ、多数と多数決で採用された「Ａいもうと」に投票いただいた方には＋２ｐ、さらに自由記入欄のネタがガッツリ反映されたふ～ちゃんさん、ニコさん、もりぎ呉服店さん、ユキさん、俊太さんには＋３ｐ、ちょっぴり採用されたみぐらさん、石澤さん、猫井翼さんには＋１ｐ差し上げます。

Direct shopping for fanclub only.
おみやげ物うりば
How to order your favorite items.

LATEST GOODS!

[屋上の百合霊さんグッズセット]





登校風景のイメージボードと、チビキャラをあしらったクリアファイル2枚組に、開運百合開きシールをセットにしました。通販でお求めいただいた方にはもれなく、右の「商科九ツ星女子学園学生名簿」（フルカラー20p）をお付けいたします！

通販価格　1,000円(税込)

※単品注文の場合のみ、メール便での発送も対応いたします。送料300円を追加でご入金ください。他のグッズ・ソフトと一緒のお申し込みや、宅急便配送希望の方は右下の送料をお支払いくださいませ。

STPN5TH GOODS



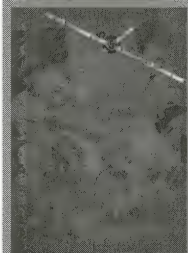
スチームパンクシリーズ5周年記念CD

[ricordo]

この5年間の軌跡を、音楽を通じて辿るメモリアルCD。シリーズ全OP・EDの他、このCDの為にアレンジ・新録したボーカル曲を追加してお届けします。また、ジャケット・ブックレットは、皆様と一緒にこの5年の足跡を辿る旅に出るというテーマで、ふんだんに写真を撮り下ろしました。

通販価格　2,500円(税込)

※単品注文の場合のみ、メール便での発送も対応いたします。送料300円を追加でご入金ください。
※FC通販でお求めいただきますと、もれなくカラオケデータや、年末ライブの映像・ドラマなどを収録した特典ROMをプレゼント！



スチームパンクシリーズ5周年記念冊子

[memorial book]

「紫影のソナーニル」で発売日カウントダウンを飾った美麗なイラスト群。実は多くのデータが、もっと大きなサイズのビジュアルとして存在しています。それらをフルカラーで一挙掲載の他、BugBug誌で好評連載中の「蠍発信機」からインガノック編、シャルノス編、ヴァルーシア編を完全収録&桜井の書き下ろしコメントを追記！　更にライブを彩る展示物の紹介やCDジャケットの撮影風景など、盛りだくさんの内容でお届けします！

通販価格　1,000円(税込)

※単品注文の場合のみ、メール便での発送も対応いたします。
送料300円を追加でご入金ください。



[クリアファイルセット]

紫影のソナーニルデザインのクリアファイルと、シリーズ歴代の広告画像をコラージュしたクリアファイルの2枚組セットです。

通販価格　500円(税込)

※単品注文の場合のみ、メール便での発送も対応いたします。送料300円を追加でご入金ください。



[ライブ開催記念タオル]

ライブロゴと歯車を組み合わせたお洒落なタオルです。
マイクロファイバーなので吸水性抜群&携帯や眼鏡を拭くのにもGOOD！

通販価格　500円(税込)

※単品注文の場合のみ、メール便での発送も対応いたします。
送料300円を追加でご入金ください。

※カレンダーの販売は終了しました。それに伴いグッズセットでの販売も終了いたしました。

GOODS & CD



[蒼天のセレナリア・ザ・ガイド]

破格の濃度でお送りする、スチームパンクシリーズ唯一の公式設定資料集。シリーズ世界のバックボーンや設定を探るのにも最適な一冊です。

通販価格 1,800円(税込)

※単品注文の場合のみ、メール便での発送も対応いたします。送料300円を追加でご入金ください。宅急便での発送ご希望の方、他のグッズ・ソフトと一緒に注文されます場合は次頁の送料となります。



ライアーソフト初のボーカルコレクション！

[salute!]

ライアーソフトとぶるよぐ・マッツの歩んだ3年半を詰め込んだ、メモリアルボーカルアルバム。勿論全曲、歌うはRitaさん！　新録曲や、曲をイメージした書き下ろしイラストをふんだんに盛り込みました。ライアーユーザー必聴の1枚！

通販価格3,000円(税込)

※単品注文の場合のみ、メール便での発送も対応いたします。送料300円を追加でご入金ください。宅急便での発送ご希望の方、他のグッズ・ソフトと一緒に注文されます場合は次頁の送料となります。

USO. BACKNUMBER

月刊うそ。バックナンバー

現在ご購入いただけるのは [illegible] 号です（[illegible] は、在庫は完売いたしました）。**1冊400円（税込・送料込）**。[illegible] 80円切手で受け付けております。[illegible] 必ずご希望の号数と冊数を明記した紙を同封してください。[illegible] WEBでもお知らせしております。万一在庫切れの場合は、[illegible] 返金いたします。



GAMESOFT

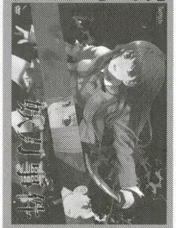
第1弾『ちょ～イタ～素晴らしき超能力人生～』～第25弾『水スペ川野ロノブ探検隊』までの作品、及びレイル第1弾『霞外籠逗留記』は販売を終了いたしました。 現在、追加生産・通販は行っておりません。一部タイトルは弊社HPよりDL販売しております。『妖刀事件』は市場販売を終了いたしました。同タイトルはDL販売を予定しておりませんが、FC通販では今後もお求めいただけます。「紅殻町博物誌」は近日販売を終了し、DL販売に移行いたします。『FD3読参子育成計画』『B級企画』はファンクラブ通販のみの限定商品となり、現生産数のみで販売終了となります。

『FD3読参子育成計画』



2004年11月発売
通販価格 2,000円（送料込）

『妖刀事件』



2006年10月発売 （※1）
通販価格 6,800円/7,400円

『Round a Go! Go!』



2007年7月発売
通販価格 5,400円（※2）

『B級企画』



2007年8月発売
通販価格 1,000円（※3）

『紅殻町博物誌』



2009年7月発売
通販価格 7,040円（※4）

『白光のヴァルーシア』



2009年11月発売
通販価格 7,040円（※5）

『どすこい！女雷相撲』



2010年3月発売
通販価格 7,040円（※6）

『信天翁航海録』



2010年7月発売
通販価格 7,040円（※7）

『紫影のソナーニル』



2010年11月発売
通販価格 7,040円（※8）

『ハチポチ』



2011年3月発売
通販価格 7,040円（※9）

『オイランルージュ』



2011年7月発売
通販価格 7,040円（※10）

『花散峪山人考』



2011年11月発売
通販価格 7,040円（※11）

最新作！『スチームパンク Fullvoice ReBORN』



2006年「蒼天のセレナリア」発売から始まった、ライアーソフトのスチームパンクシリーズ。かねてより要望の多かった「初期3作品のフルボイス化」が遂に実現！20000ボイス以上の追加に加え、各作品ビジュアルを新規に追加。ゲームパートスキップも実装して、初プレイにもリプレイにも最適の仕様で、お求めやすい価格となって戻ってきました！

※DVD－ROM専用

2011年12月発売

通販価格 各3,000円

ただいまこちらのゲームを通販でお求めいただきますと、通販特典として、原画家&スタッフの寄せ書きコピー同人誌「スチームパンクトリビュート」が付いてきます。

通販特典

※1：『書き下ろしNETRIDEカード』付き7400円（NETRIDEカードはダウンロード販売にご利用いただける金券です。不要の方は6800円で本体のみお求めいただけます）／※2：卓上カレンダー付き（カレンダーはソフト発売当時の物ですので、今は実用いただけません）／※3：B級企画は「LOVE&DEAD」の世界を描いた完全独立シナリオ。単体でお申し込みの場合は、メール便でお送りいたしますので、送料を300円ご入金ください／※4：おまけシナリオCD「人見十湖のG級ソロ日記」付き／※5：おまけシナリオCD「それは、彼女達の幕間」付き／※6：おまけシナリオCD「胸がドキドキ宇宙場所体験」付き／※7：特典冊子「信天翁航海録流出版」付き／※8：おまけシナリオCD「幾つかの、冴えたやり方」付き／※9：特典冊子「月刊うそ特別号」付き／※10：特典ROM「ある大紋日の高瀬屋」付き／※11：特典CD「レイルソフトサウンドトラック」付き

▼一部、限定特典の在庫確認はメールにてお願いいたします。

■ヤマト便送料

下記に該当しない地区	640円
関西地区　北東北地区	740円
中国地区	850円
四国地区	950円
北海道　九州地区	1060円
沖縄地区	1260円

◎通信販売について

グッズ・ソフトには郵便振替，銀行振込，現金書留，**ヤマト便代引**がご利用いただけます。

①郵便振替の場合

00140－1－600184
加入者名 ㈱ビジネスパートナー

※通信欄に希望商品名・配達希望曜日／時間をお書きください。氏名・住所・TELもお忘れなく！

②銀行振込の場合

みずほ銀行新宿支店（普）5431181
加入者名 ㈱ビジネスパートナー

※入金後、控えをFAXまたは郵送で弊社までお送りください。その際、住所・氏名・TEL・ご希望の 商品名・ご希望の配達曜日／時間をお書き添えください。

【控えの送り先】（FAX）03－3355－6736
（郵送）奥付の住所へ「通販」係宛に

③現金書留の場合

※奥付の住所まで、代金をお送りください。
封筒内に氏名・住所・TEL・ご希望の商品名，ご希望の配達日／時間をお書き添えください。

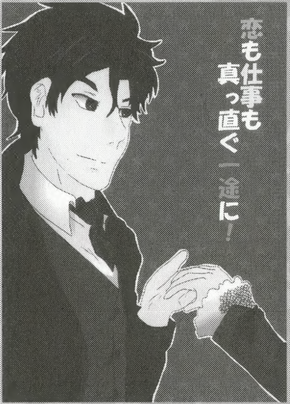
④ヤマト便代引きの場合

※ホームページの「代引き申し込みフォーム」より，ご希望の商品をご予約ください。折り返し，注文確認メールをお送りします。お申し込み内容に間違いない場合は，1～2週間前後でお送りしますので，お受け取り時に代金をお支払いください。お申し込み内容に間違いがある場合，キャンセルする場合は急ぎ3日以内にその旨メールにてお知らせください。

※代引き以外でのご注文時，メール便でお送りできない荷物につきましては，左の送料を追加でご入金いただくか，着払いでのお受け取りとなります。

※FC会報・ファンディスクの価格は送料込みです。単体でのご注文時はメール便でお送りします。他のアイテムと一緒にお申し込みいただいた場合は着払いでお送りいたします。

○同人誌紹介

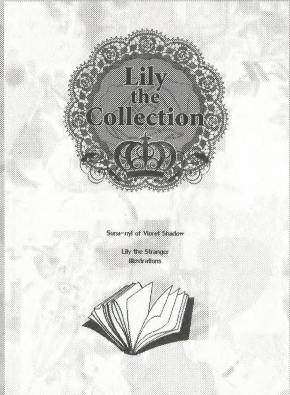


「恋も仕事も真っ直ぐ一途に」

●ジャンル：漆黒のシャルノス
●サークル名：ｍｉｒｒｏｒ　ｅｃｈｏ
●発行日：２０１１．０８．１４
●装丁：Ｂ５・本文１６ｐ

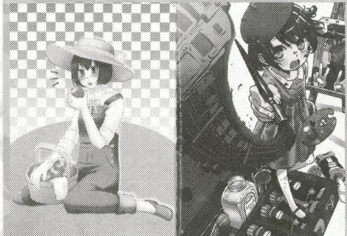


メアリと一緒にハドスン夫人の元へやって来たザック・マーレイ。緊張しているようだけれど、その理由は…？　そんな導入で始まる『漆黒のシャルノス』ザクメアな一冊。甘酸っぱさ溢れる素敵な御本です。それにしてもザックったら、あらまあ、あらあらまあ…。拝読しているうちにどんどんハドスン夫人モードになっていく桜井です！（桜井）



「Lily the Collection」

●ジャンル：紫影のソナーニル
●サークル名：リリコレ編集部
●発行日：２０１１．１２．３１
●装丁：Ｂ５・本文フルカラー３６ｐ
●ＵＲＬ：http://sora-blue.net/~lilycolle2011/
●twitter：lilycolle2011



リリィ・ザ・コレクション、通称『リリコレ』。なんとなんと総勢20名を超える方々が描かれた『紫影のソナーニル』主人公リリィのあんな姿やこんな姿の数々が収められた、愛溢れる一冊です。本文フルカラー、更には御本の中の絵とはまた別の描き下ろし絵で作られたイラストカード付という豪華仕様にも興奮冷めやりません。ごちそうです！（桜井）

※同人誌を是非お見せください！ご希望のライアースタッフが本をご紹介いたします。サークル情報など掲載できますので、本と一緒にメモをお入れいただければ幸いです。

ライアースタッフQ&A

第2回「グランテール井上」グラフィッカー

「グランテール」の由来について。
（かいむなつきさん、コマルトさん、ふ～ちゃんさん）
「グランテールの由来は『レ・ミゼラブル』なのでしょうか？」と書いたふ～ちゃんさん、ご明察です！　ちょうど入社当時に再読中、グランテール氏の駄目人間ぶりに敬意を表して拝借した次第です。

グラフィックチームはどのような人数・分担で動いているのですか？　その中でグランテール井上様はどのようなことをメインにやっておられるのですか？（アンドリューさん）
主に、私とainaさんがキャラクター彩色、たまに背景。
犬太郎さんがシステム関係や一部ムービー、特殊効果（アニメ）等を中心に、しまさらさんの補佐。
チーフのしまさらさんは、効果、仕上げ、背景などCG全般に関わり、かなりの量の作業をこなされています。

グラフィッカーになったきっかけは？（ニコさん）
突然エロゲ作りたい病にかかる→サイトを巡って求人情報を集める→ライアーさんがグラフィッカー募集してるよ！　でもアタイなんかに勤まるのかしら。ポチッ。ああ手が勝手に！→なんか採用された
ちなみに前職は書店員です。

あのー、いつから存在していたのでしょうか？（ふ～ちゃんさん）
上記のコントが大体５年前のことです。でも新人です。

今まで一番大変だった作品、CGを教えて下さい。（あかべこさん）
水スペの「ノブと高子の水浴びを覗き見ている原住民が、エレクトのあまりコテカを額にぶっ刺す」ＣＧです。
「二つの意味で珍（チン）ケースが勃発」といううまいことを考えてしまって、誰かに伝えたい！でも恥ずかしくて言えない！などと悶えていました。大変でした。

自分が原案をやるとしたらどんなゲームを作ってみたいですか？（猫井鳶さん）
本格推理ものかデスゲームものかフェイクドキュメンタリーホラーです。

以上です。
全てに答えられなくてすみません。
名前以外いじりようのない人間にも関わらず、沢山の質問をお寄せくださりありがとうございました！

※質問をお送りいただいた皆様に３ｐ、採用させていただいた皆様に５ｐを差し上げます。次回は同じくグラフィックチームの「ａｉｎａ」ですよ～。

【編集後記】まずは、会報巻末漫画ですが、諸事情（例：やんばるが忙しくて発注を忘れてしまった）により今回お休みさせていただきます■楽しみにしていただいた皆様、Ｌｅｍさんゴメンナサイ■そして投稿コーナーが狭かったため、その他宛（と私宛）の投稿全然紹介できませんでした■流石にライター優先なんでねー■ゴメンナサイ、懲りずに投稿いただけたら嬉しいです■さて、大機関ＢＯＸ怒濤の発売を経て記念すべき３０弾が百合ゲー！■２０１２年もライアーソフトは前のめりに攻めていきますよ！■９月のライブ情報も次号では突っ込んで公開します■あっと驚く仕掛けを考えていますよ。スチパンライブとは全く違った趣向になると思いますのでどうぞお楽しみに！■ではまた次号～

ライアーソフトファンクラブ会報
『月刊うそ。』第40号
年４回季刊発行　2012年1月31日発行

発行：（株）ビジネスパートナー　ライアーソフト
編集：山原久稲　表紙レイアウト：しまさらゆめき
表紙：忌野Ｌｅｍ　印刷：（有）あかつき印刷

《お便りの宛先》
〒160-0022　東京都新宿区新宿1-25-3
エクセルコート新宿301
FAX.03-3355-6736
e-mail fc@liar.co.jp

※会員ページの投稿フォームもご利用ください。
各投稿には『ＦＣ投稿・●●係』とコーナー名を明記してください。
第41号の掲載〆切は３月16日（金）必着！

次号会報４１号は４月末刊行予定。ライブ情報や発売中作品は勿論、３１弾、３２弾と開発中の新作情報や、レイルの第５弾情報などもお見せできるかもかも？

屋上の百合霊さん Liar soft 30th

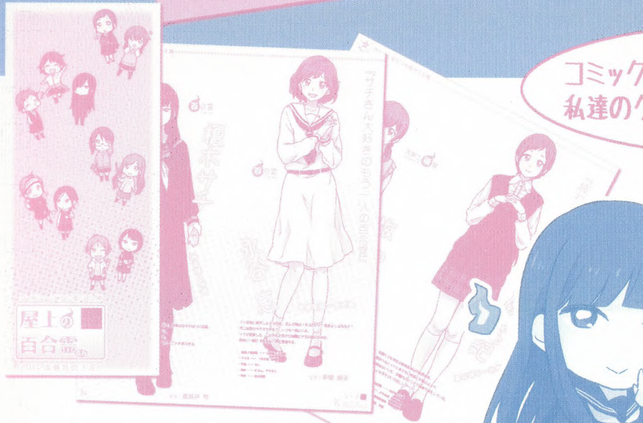
限定グッズ 通信販売のお知らせ





セット内容

・クリアファイル２種
・百合満開シール１枚
・先行冊子
「商科九ツ星女子学園
学生名簿」





詳しくは会報内の
通信販売ページを見てね

ライアーソフトファンクラブ会報『月刊うそ。』
二〇一二年一月三一日発行
(株)ビジネスパートナー ライアーソフト
年四回季刊発行